
僕の世界・世界の中で

zira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の世界・世界の中で

【Nコード】

N0819I

【作者名】

z i r a

【あらすじ】

久しぶりに仲良し3人で昼食を食べにいった。そこにまちつけたのは…トビラそして異世界……いきなりRPGっぽいんだけど……まあ 帰れるっしょ？

(1話は つままないで 流し読みでいいかとw)

01 変わらない「はず」の日常（前書き）

異世界モノ 大好きですっ

楽しんでいただければっ

タイトルの略し方は「なので」ですっ

01 変わらない「はず」の日常

第一話 変わらない「はず」の日常

「パラレルワールド」と聞いたことはあるだろうか。ゲームの世界物語の世界も同じようなものだろう。

一度は 試してみたいと思ったことがあるだろう。

そんな世界は存在しないと普通の普通に生きている大人なら馬鹿にするだろう。だが、実在したらどうだろう。

例えばゲームのように コマンドがあったり、クエストをこなしたり、あるいは男と女がぎやくになったり 草木がしゃべったり。そんな 夢のような世界があるだろうか。

夜 窓をあけると 心地よい風が吹いている。

ちょっと 足をのびして 外でうちわを仰ぎながら散歩をして見る。セミの鳴き声が聞こえる。ちかづいてみると とんでいってしまっ
た 夏 暑い夏。

???：うわぁ やべえ！

あわてながら 階段を降りていく。

浅井 蘭 13歳 明星中 剣道部 夢なし。

昨日安かったので買ったサンドイッチを賞味期限などおかまいなしに 口にほおばった。

蘭：ほんで ほほして ふれははっふの！?

母：なにいつてるのか わからないけど おこしにいったのよ?

蘭：ぷはっ もういい！いつてきます！

バッグをしょって ちょっと 不機嫌そうにでていった。

いつもなら みんなと一緒に行くのだが待ち合わせ場所にはいなかった。少しくらいまってくれていいのに・・・

自転車を本気でこいでいった。みんながいないとペダルが重く感じた。

蘭：先輩におこられるかな・・・

今日は朝練しかないが、やはりおくと 罰走などもある。

駐輪場に自転車を置いて 剣道場に向かった。

部室のドアを開けると 一瞬目線がこっちにきて すこし静まる。

そのあと しゃべり始めたり 用意したりしていた。

???：蘭！ギリギリだな

こいつは 幼なじみの 加藤 純 同じ剣道部 おれより 頭いい
し スポーツ万能。

蘭：おいてくたなよ・・・

純：わりいわりいでもお前が遅れたら先行っていいっていったんじ
ゃん

蘭：五分ぐらい 待ってくれよ・・・

先輩：おいそこ！ 早く着替える！

二人：はい！

返事はしたが ちょっと心がモヤモヤした。

先輩たちだって 話したりして おくれたりもするからだ。 部活

がはじまって そのまま部室に残ってしゃべって人もいる。

自分達だけ 怒られるのはしゃくだったが くちこたえすると 罰
走がまっている。

顧問の先生は 終わりの十五分ぐらいしかこないのだから だれもしか
る者がいない。

着替えて三時間ほど練習する。 県大会などを狙うなら もう少し練
習したほうがいいと思う。

一年は大体一時間ほどの素振りと運び足やすり足（剣道の基本）から始まるが 純は二年生とかわりない力量なので 最初から混じってやる。

蘭はいいなあと思いながら ちらちら 試合をみながら 素振りをした。

先輩：一年！試合やるぞ！

一年：はい！

一年は七人 男五人 女二人いる。

試合といっても 試合は一年同士でしかやらない。純はこのときは一年でやる。

蘭と純が大体いっしょにやっているが 8割純が勝っている。

蘭：くっそー もう一回！！

声を張り上げて リベンジをしているうちに 時間になってしまった。

顧問の先生に

一同：ありがとうございます

つといて解散した。

バッグを肩からかけて 自転車をこいでいった。

蘭：今日は一回も勝てなかった。。。

純：まだまだかな？

蘭：このごろ 思うけど そうつところがお前の嫌われるところだろ？

ちよつと苦笑しながらいった。

純：負けた人が言っても 遠吠えにしかきこえないねー

蘭：うつせー

帰り道 一人の女の子の声。

????：二人ともー

蘭：うーす うわっ お前汗だくじゃん

前野 奈々 ソフトテニス部 オレの家の 二件となりですんでい
る。同じく幼なじみ。

奈々：だって 校外三周とか ありえない きつつすぎる

明星中には 校内コースと校外コースの二種類コースがあり 校内
400m 校外700mだ。

純：三周かぁ 結構つらいな

蘭：おれは 余裕だねー

純：お前だからだろ？

蘭は親が ピクニックやハイキングなどが すきだったため 登山
などを結構歩いたり走ったりしていた。

奈々：ネーネー 今からどっか食べにいかない？

純：おっいいね

蘭：このメンバー で行くの 久しぶりだな

小学生のころは 祭りや映画などをみにいった。

中学生になると 部活なので 用事があわなかったのだ。

奈々：じゃあ あとで うちの家にー

蘭：うーい

みんな 荷物などをおいてからいくらしい。

ちよっと ヒサシブリなので ワクワクしていた。

蘭：もおきてんの？

純：お前 本当におくれるな？ くせ？

奈々：ここでヒーローは

蘭：はいっ いこうかー

はなしをそらすのは 得意ってか こういうのが もお毎日だ。

グチを三人でいいつも 歩いてちかくの ファミレスに行った。

メニューをみて 呼び出した。

奈々：私 トマトピザで

純：ドミグラスソースオムライスで

蘭：んじゃー エビチャーハン あとドリンクバー3人

店員：かしこまりました

ひざをついた 店員が立ち上がり 厨房に伝票をわたした。

奈々：あんたら ほんっと ご飯類好きだねー

純：まあよくね？

蘭：チャーハンよりも えび だよっえび

料理がくるまえに 飲み物をとりにいった。

蘭：たまにさ 色々な飲み物いれるやついるじゃん あれ ぜってえまずくね？

コーラ オレンジ ジンジャ メロン いれてるやつ 青汁のような色。

純：いや あれはありだよっ

奈々：いや 無理 まじいよ

2 対 1。

蘭：お前もその一員か・・・

純：いや ちよっとまてっ だんじて おれは悪くない だって
奈々：うるさいっ 早く 席につこうよっ

席につこうとした　そのとき！！
まっくらになった。。

蘭：うおっ　停電？　ブレイカーでも落ちたか？

なんなんだ　これは？

店員なにやってんだよ

純：いや　外もくらいし　てかさっきまで　いた人いない・・

まだ　時計は１時だ。確かになんか　あやしい。

奈々：えっ　まって　こわい・・

バン！！

蘭：うおっ　なんだこれ？　トビラ？

でっかいトビラがたっていた。

古代の模様みたいだった。

声：お願いします

純：うおっ　しゃべった！？

奈々：いや　なんか　おくのほうから・・

声：私たちの世界を助けてください

純：私たちの・・世界？助けて？

奈々：これなに？　夢？

声：はやくっ

蘭：んーと　マンガ？（笑）てか　話はしよりすぎて　よくわかんね

純：現実だよな？

蘭：てかなんか　いかなきゃじゃね？

純：ちよつと試してみたいな

つまらない学校生活よりは　楽しいだろうと思ったのか　純はいき

たがっている。

そういう オレも少しいきたい。

奈々：えー やめとこうよ

怖がりだけは なおってねーな。

お化け屋敷に昔いつしよにはいったつきり それいこう 夜なども
一人でトイレにいけないとか。

ガラ ゴゴゴゴゴ

奈々：あっあいた！？

蘭：ちよっ まて これなんか やばくね？

ズイズイ ズルルル

やっぱりかつ

純：すいこまれる！？

掃除機のような音ではない だが 吸い込まれる それしか思わな
かった。

一瞬思った。

これって 現実？ あーっ かあちゃん・・・

すいこまれる感じは 変な感じだったが ちよっと ワクワクした。
こういう感じは初めてだった

どさっ

蘭：痛った！ てかどこだよここ？

女の人：こんにちは

変な コンピュータが女の人まわりにある パソコンのようなも
のだった。

女の方は へんなかぶり物をして 背中真ん中まで金髪が伸びて
いた。

蘭：うおっなんかいるってか 二人は？

見回してみたが いない。。 それよりも みたことない機械が
たくさん目にはいった。

女の人：説明を始めます

蘭：いやちよつとまって

女の人：この世界は あなたのいる世界とは違います

棒読みに近い感じ オレの声も聞こえていなそうだ。

蘭：おかまい なしかよつ てか少し待てって

女の人：この世界 ヴェラリルは 戦うことなどもあります

蘭：おい 話きてますかー てかヴェラリルって いいづらい
女の人：そんなときは 剣や魔法 カードなどで 防いだり切った
りしてください。

蘭：てか これなにRPG？てか カードって・・・

女の人：カードとは ヴェラリルでもっとも重要なものです。カー
ドを駆使してがんばってください では 移動します

蘭：まてって 説明になつてねえし てか二人は？てか移動つてど
こに？ おいつ

あー この世界って 話はしよるのすきな？ はあ。。。
シューーン

01 変わらない」「はず」の日常（後書き）

あさいらん かとつじゅん まえのなな

02 初めの始まり

第二話 初めの始まり

下に石版のようなものの上に立った　へんな模様だった

蘭：二人ともっ

純と奈々は先にいた

てか　なんで　おれはいつも　おそいの？　神様っ　時間戻す能力
くれよ

純：やっぱりおそいな

奈々：プッ

みわたす限り　ただの広い草原　みたことない木々や　草花があった

純：夢じゃないんだよなー

奈々：まあ　きちやったもんはしょうがないし・・・てかここにき
てから変な首飾りとリストバンドついてんだけど・・・

蘭：うわっ　なんだよこれ

外してみようとしたが　外れない　というよりも　押さえつけられ
ている感じだった

なんだよ　これっ　結構とれないし

蘭：まあ　なんかに使えるもんだろ？多分

純：だな　無理にはずす意味ないし

こういうときは　純は冷静だった。こういうときは　頼りになる。

純：てか　なんだよなー　どう考えても　ゲームの世界っぽいじゃん

蘭：なー　これからなにすればいいんだろ　てか　カードってなん
だよな

奈々：まあいつてれば わかるんじゃない？

そして 少し歩いていくと。。。

ちっちゃい看板（たて1メートル 横60センチぐらい）が へん
なところにあつた。なんでこんなところに看板あるんだよってぐら
いのところだ。

奈々：始まりの草原？

蘭：べたな名前

すこし笑いながら そのあとも読んでみた。

蘭：東にいくと・・・ 読めないな

純：まあ なにかあるんだろ？ 試ってみようぜ 街とかだったら見
てみたいし

純に賛成した。 この世界の街みたいなものは みてみたかった。

まあ 街とは限らないが。

5キロほど歩く。

風景があまり変わらない。 うしろをふりかえると 看板はもう 見
えなかった。

奈々：つかれたよー

純：やすもうぜー ここ 広すぎんだろっ

蘭：しょうがねーなー

こいつら 体力なさすぎ ありえない。 まあ いつか。

奈々やったー

と ばたんと ねころがった。

奈々：あれ！？

純：どした？

奈々：太陽が・・・

空を見上げた。

蘭：なんだあれ？ 日食？

三分の一ぐらいが かさなっていた。

純：ちがうだろ 暗くないし 多分あれ 太陽2個あるんじゃない？

奈々：キレイっ

蘭：あーっ ほんとだ 赤と青だ

赤と青の幻想的な太陽が空を装飾している。

純：日本じゃないんだよなー これが 夢うつつな 世界っていうの？

奈々：多分。 夢うつつってよくわかんないけど

蘭：たしか 現実と夢の間だっけ？ そういわれれば わかるな

奈々：ほむ↑ ほんとは多分わかってない

蘭：まあ ゲームといっしょで 助けてくださいってトビラにいわれたんだから 魔王でも倒せばいいんだろ？

奈々：えー アイテムみたいなのないの？

純：そこでカードを使うんだろ？

蘭：あー でも アイテムみたいのとはかぎらないじゃん

奈々：んーと よくわかんない

蘭：だーらさ カードっていうのが 魔法だったりもするだろ

奈々：んじゃ アイテムじゃないわけ？

純：だから そうとはかぎらないっていつてるだろ

蘭：まあ みてからだな

奈々：んじゃ みてみようよ

二人：どうやってだよ！

でましたっ 天然！ いわゆる自然系そうナチュラル。

はあ こいつら めんどくさい。

休んだので また東に行く

純：なあ こっち東か？ コンパスもってないで よくわかるな
蘭：立て札のやじるしがこっちむいてたろ？

奈々：それだけで？それが 東かどうかかわかんないじゃん

ちよつと 不安になった。 だが 山の立て札もそんなもんだ。

蘭：それだけって それしか方法なくね？ まあ とにかく進む！

純：それで こっちが 猛獣のすみかだったら 本気でなぐってやる

蘭：たんまっ 立て札の文字みえなかったんだから 東がすみかの可能性もあるだろ？

純：まあ そのときはそのときで なぐる

奈々：結局 なぐるんだ？ってか あれ 街じゃない？

奈々の指指してる方向には ただっぴろい草原にでっかいがけがあ
って その下に街があつた。

すごい 広い・・・

純：うおっすげっ

蘭：でけーな てか久しぶりに ちがう風景みた

純：こういう感じのみてみたかったんだよね

蘭：てか こっちで あつてたじゃねえか

かるく 頭をたたく

純：いや まて こっちが 東とはかぎらないじゃねえか こっち

西かもよ？ 西かもよ！？

奈々：うるさいよっあんたらっいやまじでっか早くいこっよっ

蘭：まあ そうだなっ

街に行く。。。。

03 街と職業

03 街と職業

活気があふれている。武器をもっている人などもいた。ただひとつ カッコイイ。

奈々：うわぁ 人がいるよっ しかもいいにおいがするー

蘭：田舎の人が都会に来た感じだったよ？

純：いや 田舎でも人いるからっ

と いろんな家をみながら歩いていると…

蘭：ん？

看板にクエストって書いてある家を見つけた。

ちよっと他の家より目立つ造り。てか デカイ

まあ他の家も十分普通じゃないが。

蘭：なんだ？ここ？

純：クエスト？依頼受けられんの？

ああそういうことか。

奈々：ほへー…

腹がへっているのであまり話をきいていない… だがふと思った。

お腹がへっている↓クエストをうける↓クエストをこなす↓報酬がもらえる↓お金が手に入る↓ご飯がたべられる。

奈々：はいつてみよう！

蘭：やけにはりきってんな

まあこいつさっきいいにおいとかいってたしな。

どうせ飯のことだろ 多分。

中に入ったら いろんな服や武器をつけてる人がたくさんいた。
大きいボードみたいのもある。 あれがクエスト受けるやつかな。

純：なあ あそこの 見るからに 私は説明する人です。 みたいな人に話してみようぜ

純の指差したほうには 本当に案内人みたいな女の人がいた。

案内人：ここ クエストの家は クエ屋 ギルド 集会所など 色々な呼び方があります まあ大体は ギルドと呼ばれていますね

微妙なところから 説明しはじめたな。

案内人：ここでは クエストを受けることができます その他色々ありますが まだ必要ではないので あえて ここでは 説明しません。

はあ？ なに言ってんだこいつ。

つてことは クエスト受けられるだけじゃん。 説明いらないじゃん。

横の二人も同じようなことを考えている顔だった。

そう ポカーンしている。

案内人：なんで 説明したんだっ て顔してますね。

純：そうですよっ！

蘭：おこるなよっ

小声でささやいた。

案内人：まあそうおこらず ギルドにはランクというのがありまして ランクFがあります。 ですのでランクを上げてもらえれば ほかの施設も利用していただけます

そついうことなら まあいいか。

でも やはり納得がいかない。別に説明しても 減るもんじやないだろ。

案内人：では クエストの説明に入ります。クエストとは まあそのまま依頼です モンスター退治や護衛ごえいアイテム探し ダンジョン探索 大体はこんなものです。細かくわけると 修理や人探しなどもあります。まあ簡単に言っと 何でも屋ですね

げっ そんなことやんの。。めんどくさい。

奈々：報酬はでないんですか？

あっ こいつはそういう意味か、報酬でなにかを食べると。なかなか頭がまわるな。

案内人：いやっ ありますよ？ お金だったり アイテム（武器）だったり カードだったり カードの素材 武器の素材 スキルブック まあ 色々です。大体はお金ですね

まあ そうだろ。でもカードとかも出るのか。それはおもしろい。素材ってことは あれか？合成とかもできるのか？まあ あとでだらう。

蘭：カードっていうのは？

案内人：カードはまだ一枚も もっていらっしやいませんね？なら一枚でもカードをとってから説明をします

つつ めんどいな まあしょうがない。

案内人：しかし クエストを受けるには職業をえらばなければなりません。詳しくは隣のジョブセンターに

蘭：職業かつ 剣士とか 魔法使いだろ？

純：多分な いこうぜっ

いってみると、いろんな武器をもっている人がいる。

短剣 片手剣 両手剣 二刀流 双剣 太刀 槍 魔法使いっぽい人は 杖 ワンド 本 身軽そうな人は ボウガン 弓矢 ランチャ
ー などなど ちよつと おそろしい人もたくさん。
蘭：やべっ かけー てかあれ 重くないの？
純：なー あのでつけえ槍なんて どうすんだ？
係員：なににしますか？

うおっ 早いっ てかなにがあるかわかんない。

奈々：なにが あるんですか？

係員：職業といつても 大きく分けて ハンターかフォースです
そこから なににするか 決めます。

蘭：そういうことか んじゃ おれハンター

純：オレは 魔法 使いたいからフォース

奈々：私もフォースっ

まあ これが 一番か？多分。

係員：ハンターだからといって 魔法つかえないわけでは ありません フォースだからといって 武器が使えないわけでもありません 魔法剣士などもいますからね

蘭：ほほお

おもしろそうっ 俄然やる気でてきた。

係員：ではっ いまから 別々に行動してもらいます。 では あ
なた達に幸あれっ

へ？

04 精霊武器

また ワープ。

てか腹減ってきた。こっちに来てからなにも食ってないなあ…
変な模様の石版の上。きたときもこの上だったなあ…

てか この模様見たことあると思ったら 来るときのトビラの模様だ。

ワープのときは この模様が必要なのか？ ま いいや
蘭：………

二人がいない。オレに限って一番のりってわけでもなさそうだ。
蘭：一人……か

まあ こないなら 待つてたって意味ないしな。
道があつたので その道を進む。

てかなんで別々にしたんだよ。

まあいいけど。一人はきらいじゃない。そう自由な時間。
だれにも邪魔されない。

だが 仲間はずれはきらい。そのときは寂しいと思う。
まあ気分。

歩いていると 大きな泉。

そこに小さな人影。小さな…

蘭：ちっさ！

思わず声だしまった。すげえっ これは白雪姫の小人？

小人：旅人よ ここは 精霊の泉 ここで 精霊武器をきめるのじゃ

蘭：お おう よろしく

てか ここの世界あつた瞬間 話進めてくれるから楽。

精霊武器？ 精霊ってまずなに？妖精みたいな？宿ってるみたいな？

蘭：精霊武器ってなんだ？

小人：精霊が武器に宿っているのじゃ

ああ、やはりそうか。そんな感じが。

小人：まあ よくは わからんと思うから 説明するよりやってみ
たほうがわかるじやろ

蘭：ああ ほぼ分からん よろしく

まあ 選ぶんじゃないくて やってみるとかいつてるし。

まあ やってみてわかるなら それにこしたものはないだろう。

小人は変な呪文みたいのを唱え出した。 多分 儀式的なもの。

小人：ふむ おぬしはどんなものにしてくれるかの

足元に穴が空いた。

落ちてくつていうか。吸い込まれる感じ。

また このパターンか。 なれてきたなあ。

落ち終わった気がしないけど 多分とまった。

上から声がする。

小人：そこで どんな精霊がいいか イメージするのじゃ

イメージ？ってことは 想像した精霊ができるってことか？それは

おもしろい。

蘭：おうけい

どんなもの…モンスターてきな？あつてか 人型もいけんの？まあ

あまり考えるとごっちゃになりそうだし。 こんな感じで・・・ここ
が・・・

蘭：……………

小人：いまのでいいか？

蘭：ういつ いいすよ

光が現れる。それが組み合わせさり 実体ができてくる。

そこには、可愛い青いワンピース、白黒チェックのスカート、白いレースアップブーツ、ピンクのニット帽。もお絶対 冬が似合いそうな子がいた。やべ 想像したより かなり可愛い。

小人：おぬし 本当に初めてか？上級の精霊じゃ その分 武器は使いこなすのが非常に難しいがの

そう 小人がいつて穴から出された。

精霊：召喚していただきありがとうございます。 えっと…お名前は何？

蘭：えっと オレは蘭 浅井蘭だ。 君の名前は？

精霊：私にはまだ 名前がありません 召喚してもらったときに名前をつけてもらうのですが…

ぶっはっ このネーミングセンスのない俺に名づけ？犬にワン太郎 ってつけた俺に。

蘭：んーじゃ メイってどう？

メイ：メイ・・・いいですねっ すごく可愛い名前ですっ 私にはもったいないくらい。。。。

きたっ オレにしては結構いい名前。 それにしても 本当に可愛

いなっ これが 癒し系ってやつ？

メイ：えっと それじゃ 本題に入ります 私は知つてのとおり武器です なので 私がかいこなせるかが 冒険の鍵になります。

私？って そういえば 精霊武器だったな。 どうするんだろ。

蘭：ってことは メイって武器になれる？

メイ：アタリっ そうですよ

アタリって…変身できんのこの子？

蘭：んじゃあ 一回武器になってくれる？

メイ：はいっ では 両手をひろげててくださいね

あっ なれるんだ。

と思ってるうちにメイは 光となつていった。

オレがポカーンとしているうちに 光はオレの手の上に実体化していった。

武器だ。 二本の青い剣。 二刀流だ。

メイ：どうですか？ コレが私。 二個の青刀です。

蘭：ツイン？この剣の名前？すげえ 使いにくそうなんだけど…

メイ：蘭さんなら 私を使いこなせるはずです。 まあ 今はツインです。

今は？

メイ：えーと 精霊武器には 一次 二次 三次変身があります。

今は一次ですね。 二次とかになるには… えっとギルドにランクあるのはご存知ですか？

蘭：ああ

さつき 聞いたばかりだけど。

メイ：なら話は早いです ギルドのランクが上がるごとに 育成値というのがあがります まあ クエストを地道にやってもあがりませんが ランクを上げるのが一番はやいです そのほかに 育成値は主人との相性、私の熟練度などでも 上げられます。熟練度とはまあどれぐらい 私をつかってるかですね その育成値が上がつていき 一定値を超えると 二次や三次が使えます これを武器のレベルアップボンアップといいます

蘭：うーんと 一気に説明しすぎて わかんなくなってきたけど
結局 メイと一緒にモンスターとか倒していけば 次の武器がつか
えるんだろ？

メイ：アタリっ 長い説明は 苦手ですか？まあ そんなもんです

やべえ 奥が深い。。。

んまあ 大体わかったし。

蘭：んじゃあ 帰りますか？

小人：どこにじゃ？

・・・はっ？

蘭：たんまつ さっきの街に帰れない？

小人：無論。まあ しょうがない。今回だけは 帰してやろう。ど
この街じゃ？

蘭：さんきゅっ えっと・・・

やべえ・・・ 聞いた覚えが無い…

蘭：ここにこれるのって あの街だけじゃないの？

小人：どの街じゃ？

・・・ オワタ

メイ：まあ 気を落とさず ゆっくりいきましょう

蘭：まあ そうだな

小人：すまん 町ならこの道をゆくと 小さいがギルドもちゃん
とある町がある。クレカというところじゃ。

小さくないから あの街じゃないな。 あきらめよう。

メイ：蘭さんっ 今日はもう 暗いんで明日からにしませんか？

あたりは 結構暗くなっている。 この世界 時間はあるのか？

蘭：まあ そうだな

この世界には 結構木の実がなっているらしい。
道から外れたところに 梨があった。
自然の梨？ すげえな。

この世界 初めての食料ゲット。
食べてみると。

蘭：林檎っ？

メイ：なんですか りんごって？

梨じゃない・・・これ林檎だ。

白い林檎。 すげーっ

メイ：なんですか！？りんごってー！？

だめだ。 この世界おもしろい。

結構その木から ナシンゴ（命名）を集めておく。

そこらじゅうから 枝や木を集めて 焚き火をした。 小人に火の
魔法をしてもらった。

上級者になると 口で唱えなくていいらしい。

小人の小さい杖から 火がでてきた。 ちょっと感動。

今日は 長かった。 この世界 24時間かなー・・・

色々な疑問をもちつつ 女の子と二人でねるのって初めてかと思
ったりしながら今日はねむりに落ちた。

林檎って・・・ 寝言が聞こえたような・・・まあ 可愛いそう
だが ほっておこう。

05 クエスト

小人に言われたとおり 細い道を進む。

精霊は餌がないと具現化できないらしい。餌は 果物とかそんなの。まあ ヒビツタのは 精霊って 首飾りで休むらしい。

首飾りは この世界にきたときに なぜかもつてた道具である。

この首飾り 精霊の生命力やマナ（HPやMP）を蓄えてあって、消費した生命力とマナを回復するらしい。

生命力はモンスターなどを切ったとき、マナは特殊能力のときだそうだ。

首飾りに蓄えるのは、主人この場合はオレの体力からとるらしい。そんなに精霊は消費しないらしいが、流石に戦闘と精霊の消費、首飾りの吸収。これ全部が一気にくるため、かなり体力を消費するらしい。

問題は最初のころ。精霊と息が合わず色々と面倒らしい。しかも上級の精霊だと消費量は半端ない。場合によると……

蘭：死んだりする？

首飾りの状態でも話せるし、心もつなげる。結構便利らしい子の

首飾りは。

心をつなぐと 心の中に入って会話できたりもする。

まあ それは後々

メイ：死にはしないと思いますが、私が毒にかかったりすると、治すためにずっと主人の体力を吸収していくので その場合は倒れたりはするでしょうね

蘭：やっぱりか てか精霊も毒かかるんだ？

メイ：かかりますよ マナとか足りないと よくかかりやすくなりますね マナにより耐えられるようになれますから そのほか 風邪や麻痺とかも まあ大体人間といっしょですよ

やっぱり奥深い。

そんなことを言ってるうちに クレカについた。

最初に来た町とは 全然ちがう。 露店が多くなっている。

商品に名前と値札がついている。

そういえばこの世界の文字は全然日本語とちがうのに なぜか読める。この人たちも日本語話してる気はしないが、なぜか なに言ってるのかわかる。

まあ 分かるならいいけど。

一回クエストを受けようと思ったので ギルドに行った。

ギルマネ（ギルドマネージャー）：クエストボードからクエストを選んで よこにある 依頼書を持って クエスト契約をカウンターでして下さい

蘭：ふーむ・・・

本当に色々とある。 フランクでさえ 二十個ぐらいある。

蘭：手始めにモンスター退治でいい？

メイ：はいっ 多分能力が分かりやすいのはモンスター退治だと
蘭：おけっ

狩場が近いところを選んで 依頼書を持っていった。

契約金はないらしい。 もってないので 結構ありがたい。

蘭：このシラノってどういうやつ？

畑が荒らされるのでシラノを倒してくれみたいなクエストだった。

メイ：えっと シラノっていうのは 群れで行動する灰色の狼です。

動きは狼のくせには そんなには速くなく簡単だと思います。

蘭：狼か

門を出て すこし外れたところらしい。

簡単なクエストなので パーティ（PT）は組まなくていいらしい。
PTとは 他の冒険者と組んでクエストをこなすことである。 あ
まり組むのが苦手なので都合がいい。

門を開けてすこし進むと・・・

蘭：・・・・・・

目の前に広がるシラノの群れ ざつと60 70匹ぐらいだろう。

蘭：あ あれは多すぎね？

メイ：で ですね…まあ 腕の見せ所ですよ？

蘭：そういうのって すげー修行したときにいうんじゃない？

メイ：最初の戦闘でつかったっていいじゃないですかっ

そうなのか？まあ オレがどれぐらいの腕かって意味で言っただ
ろう。

メイ：んじゃ いきますか

首飾りからメイが出てきて武器になる。

武器を手に取り シラノのほうに向かう。

メイ：ちょ ちよつと待ってください！？ 近接攻撃じゃあんな大
勢は無理ですよ？

足を止める。

蘭：たんま この武器じゃ遠距離攻撃 無理じゃね？

メイ：あつ まだ言ってますでしたね。 マナを武器におくりこ
んでください。

えつと・・・

蘭：たんまつ しらねえよ？送り方なんて てか無理じゃね！？

今の声でシラノたちがこちらに気付いてしまった。

メイ：気付いちやいましたよ？

蘭：ちょまっ どうやるんだって？ オレ魔法使えないよ？

群れが走ってくる。もお あいつ動かないぜ？いまトツチメテヤロウ みたいな勢いで。

メイ：えつとですね・・・やり方は体全体に巡っているマナを手を集めてそこから剣につたえるんですけど・・・まあ 本気で剣を握って 剣から真空派がでるイメージをします それで剣を思いっきりふってください

言われるまま やってみる。 まあ 思いっきり空振りしろって話だろ？

半信半疑のまま 思いっきりツインでクロスする感じに振る。

蘭：わおっ

青い真空派が 剣の先から出た。 シラノたちが一気に倒れる。

蘭：なんか 特撮映画ぽい・・・

メイ：とくさつ？？まあ ソニックブームこれが剣から出る見えない刃です。

蘭：ソニックブーム（S B）・・・カッコイイなっ 楽しい。

メイ：あと 同じように マナを入れると 剣から弾がでますよ？
蘭：ほう

引き金もなにもないが さっきと同じようにやると、引き金が現れた。

引いてみる。剣の先から 青い弾が出た。だが シラノたちもそんなに馬鹿じゃないらしい。 さっきので大体わかったのであるう。かろうじて上にとんで よけた。

メイ：今のが ソニックガン（S G）です 大勢にS B 少数にS Gみたいに使い分けるといいと思います マナはかなりS Gのほう

が消費少ないですからね

蘭：おうけい

両方の剣にマナをためて 片方の剣でS Bをする。よけられたところをもう片方の剣でS Gをする。

さっきので 知ったがS Gのほうが少し速い。このコンビ技使えるなあ。

たまに 動きが速いやつが 近くまでくる。 そのときは マナを使わないために切る。

切った感触が手に残るのは 嫌だがしょうがない。

そんな事を考えているうちに・・・

蘭：げっ

オレを囲むように8匹が円を作った。シラノはこれだけっぽい。

メイ：ピンチってやつですね

蘭：おいおい そんなこと言ってていいのかよ。なんかないの？必殺技みたいの

メイ：ないですよ 戦い方はお任せします。

蘭：ぶっは

完璧に人任せだな。 さてどうしたものか。 マナも多分もおぼないと思う。 力がいらないし。

8匹が一斉にかかってくる。

まず 前にいる2匹を切る。

その隙に後ろにいるやつが噛み付いてくるんだろうと思い、上向きに倒れる。

上に跳んできた二匹をS Gをするで倒し、まわしげりをして4匹をふつとばす。

こっちにきてから 運動能力が上がったばい。 世界で重力とかがちがうんだろう。

蹴った感触でどこに吹っ飛んだか考えてそのほうにSGをする・・・
・思ったがマナが切れたのか引き金が出てこない。しょうがなく
うしろにいる2匹に剣を投げる。剣持ってなくてチャンスとでも
思ったのか思いつきり2匹が走ってきた。

うしろにとんで ツインをとり 左右にたたつ切る。

メイ：流石です！

蘭：まあ こんなもんだろ

タメ息もらして、思い出したように 左手 人差し指をおでこらへ
んにたてて 20センチほど離す。

ひさしぶりにやったなあこのポーズ。

メイ：なんですか？それ

実現化した メイが？みたいな顔してみてきた。

蘭：これ？ おれの決めポーズ

色々という意味がある。

次いってみようとか オレが一番とか おまえの頭悪いなとか
まあ それは後々

バックから ナシングを二つとりだして メイと一緒にかぶりつい
た。

疲れたからか すごく美味しく感じた。

05 クエスト（後書き）

自分も気に入ってるポーズですっ

06 カード

すげえ疲れた。

マナの使いすぎかぁ・・・

倒れているシラノの群れ。全部これ倒したんだよなあ。

メイ：初クエスト クリア おめでとです 初クエストとは おもえませんよ

蘭：なー こんなに倒せるなんて そのかわり 本身体動かないんだけど

メイ：あんだけ マナを使っただけですから 無理もないですよ
蘭：そっか

ギルドの人がシラノをあとで処理してくれるらしい。そのときにクエストの報酬きめるっばい。

メイ：蘭さん

蘭：ん？

メイ：変なこと 聞きますけど 蘭さんってここの世界の人じゃなかったりします？

ああ そういえば 話してなかったか。

蘭：どして？

メイ：身のこなしというか そのランクでマナありすぎだとかもお反則キャラっていうか

蘭：ぶっ

思わず吹いてしまった。これでもマナ多いんだ。

蘭：ってことは・・・メイってマナの消費量大きい？

メイ：はいっ 普通の精霊武器より4 5倍は消費しますね

蘭：うえ やっぱりか

まあ 最初から武器強いもんなあ。

メイ：で どうなんです？

蘭：うーん

いつそのこと 全部話しちゃうか。

これまでのことを全て話した。なぜか異世界にきたとか 友達とはぐれたとか。

メイ：ふむ ってことは やはり ライの召喚でしたか

蘭：ライの召喚？

メイ：はいっ たしか北のすごく寒い国には アイスバード 氷鳥神と言われる

すぐ大きい祭られているモンスターがいるんですよ そのモンスターしょうかんしのマナをお借りして サブリル・ライブスって召喚師が 異世界から人を呼んで魔王を倒してもらってますけど・・・えっとですね 三人同時なんてなかったです いま 魔王は復活してなくてですね

蘭：はあ？ んじゃ なんてきたの？

メイ：多分・・・気まぐれ？

蘭：ぶはっ

ひでーっ どうやって戻っててはなしだよ・・・こういうのって魔王倒したら帰れるんじゃないのか？

蘭：その前よびだされた人ってどうやって 帰ったかしってる？

メイ：いや 帰ってないです 魔王と相打ちで死にました 世界に平和が訪れたみたいな話ですよ

蘭：あうあー

面倒なことにまきこまれた感じがかなりあるんだけど。

蘭：まあ　なんか手段はあるだろ
メイ：ですね

体力が回復してきたし　ギルド戻って報酬をもらうことにした。
ギルマス：ランクFでのシラノ討伐　なんとランキング3位にのつたわよ

蘭：三位ですか？

反則キャラならもつとっていいはずだけどなー

メイ：3位でもすごいですよ？

蘭：まあ　いいか

ギルマネ：これ報酬ね

大きい袋（多分金）　ああそだ　ここの金ってリルって言うらしい。
あと　黒いビニールにつつまれている　四角いカードみたいのを渡された

ああ　これがカードか。

ギルマネ：カードは初めてよね？はい　これカードホルダー

あの　レアカードとかをいれておくやつ。

ギルマネ：カードは　ステータスの向上　召喚獣　魔法を覚えると
き（マジック・クラフト）

などにつかいます。　召喚獣はいつしよに戦ってくれるモンスター
移動用に馬とかを召喚してもいいわね。魔物を倒したときに　たまに出ます　ギルドの報酬でもまれにもらえます　魔法は　たとえば　ファイアを覚えたいときに　カードを使ってファイアを覚えられます。そうすると　カードをつかわずにファイアを使えるようになります　ほかに色々カードはありますが・・・

蘭：またあとで？

ギルマネ：そうですね

またこのパターンか。

まあ これはかなり面白いな。

ギルドから出て ビニールから出してみる。

小3のころかった トレーディングカードのパックをあける気分
なつかしいな。

蘭：おお

二枚はいつてて 名前が上に 説明が下に 絵が真ん中。 日本の
と変わんないな。

メイ：ビルドアップとスピードアップですね ステータス用です

蘭：ほむ これってどうやって 使うん？

メイ：半分に破れば使えますけど モンスターと戦うときがいいで
すよ？名前のよこに＋

ビルドアップ＋なら ずっとあがったままですけど なにもついて
ないと 一時的ですから

蘭：おうけい

おくが深いなこの世界。。。。

果物だけでは 腹がみたないってことで 露店をまわってみる。
本当に色々うつてんなあとか 思いつつ。。。

蘭：うお！？

この茶色く 板状のものは。。。。

蘭：チョコレートだっ いたチョコだっ

かなり大好き。 甘いのがもお たまらない。

かなり 大きい。 めい。のチョコレートの二・三倍はある。

メイ：蘭さん チョコレート好きなんですか？

蘭：かなりな

こつちでもチョコレートというらしい。

こんなのに めぐりあえるなんて。

おじさん：買うかい？

店の人が 聞いてきた。

これは 迷わず買いだ。

蘭：おじさん 2箱くれ。

二枚じゃないよ2箱だよ。1箱10個入り

メイ：蘭さん・・・買いすぎ

蘭：まあまあ

おじさん：おお あんちゃん いきがいいね んじゃ おじさんが

らもコレ ダムバックあげるよ

親切そうなおじさんは やはり親切だ。

蘭：おお ありがとう

お代をしつかり払った。

蘭：このバック普通のじゃないの？

メイ：それは 拡張魔法ダムっていう魔法をかけてありまして
いくらでもモノが入りしかも その食べ物が一番いい温度に保つてく
れるんですよ ほかのものをいれても 全部ちがう温度に管理され
ます ダム使えるひとつって あまりいいんですよ？

蘭：そんないいもん もらったんだ

チョコをひとつだけとって あとは 全部しまった。 おお 重く
なんないな。これすげえ ドラ。もんのポケットみたい。
チョコを食べてみる。

蘭：うおう うめっ

パリっていう音がたまんない。 口の中に甘みがひろがる。 後味も悪くない 最高。

そのほかにも 果物や 料理 かるい調理器具とかも買って 全部つつこむ。

料理は余裕で二週間もつらしい。 すげっ

チョコの買いすぎで 金がほぼなくなつた。

メイ：あんなに 買うからですよ。 まあ バックもらつたから全然いいですけどね

蘭：はいはい

メイの声をスルーしながら ギルドにクエストをうけにきた。

ギルマネ：クエストよりも あんたなら 昇格試験いってみれば？

蘭：ん？ なにそれ？

ギルマネ：ランクを上げられて クエストの幅が広がったりするのよ。

おお そりゃいいね

ギルマネ：となり町のサーナスつてところで明日やるわよ 筆記試験もないし さっきのクエストの成果見る限り 多分余裕だわね

蘭：ここじゃないのか おけい

店で地図を買う。 ここ周辺のしかないから 安かつた。

あと 二刀流・双剣の本を買った。

サーナスまで 2kmぐらい 明日の朝からいけば 余裕だな。

蘭：なんか クエストやる？

メイ：倒れますよ？

そりゃそうだな。

今日は宿で寝た。 フカフカのベット。

今日は本当に疲れたので ぐっすり眠れた。

07 ソツとする試験？

食糧も買ったし。行きますか。

地図で道もわかったし、ギルドの人にもちゃんと聞いた。多分大丈夫だろ。

昨日買った本を歩きながら読む。こういうのは歩くので揺れて読みづらいのだが、結構なれてしまった。登山で。

メイ：そんな分厚い本読むんですね。私じゃ全然読む気になれませんし。蘭さんだってそんな知的な感じじゃないのに。

蘭：まあな。読書は好きだし

漢和辞典よりは。小さいが小学生が見るともう無理と挫折するだろうという大きさ。

だけど。コレすげえな。かなり高い技術が載っている。

ヴェラリルの文字はなんとなく読める。多分読めないところはまたランクとかが関係するのだろう。

メイ：ああ。それはランクが関係してます

蘭：ああ。やっぱりか

大体この世界の基準らしきものが分かってきたな。

まあ。やっぱりランク上げという損は無いだろう。

二刀流には。色々な持ち方があるらしい。

一つは正持ち。ふつうに持つこと。

次は逆持ち。刃を下にして。どっかの盗賊っぽい感じに。

最後に片手持ち。指に挟んで。持つやつ。これは片手で間合いをとれるしい。まあこれできないけど。指にはさんでたら絶対に落とす。そんな事を考えながらチヨコをほおぼる。

蘭：これ甘いな本当

こんな甘いのが作れるんだ。とか思っている
がさがさ

メイ：あつ本当 甘いですね

横にいつの間にかいるメイにチョコを取られていた。まあいいか
可愛くて怒れないし。

蘭：おつ あれじゃね？

結構小さい町。ちがうチョコないかな。

つてか この旅がチョコを探す旅になっちゃうじゃないか。
つてか これ旅？いや 旅。

町に案内板らしきものがあつたので ギルドを見つける。

蘭：こういうのがあると結構楽だよなあ

メイ：中々ないですけどねえ

露店など結構あるが 申し込みが午前中らしいので 早めに行く。
ギルドカードみせるだけで 完了。

ギルマネ：おう んじゃ はやめにいつとけよ

ふう。おわった

少ししか時間がないので 会場で本を読んでおくことにした。

蘭：で どっちがいいと思う？

メイ：えつと 正持ちか 逆手もちですか？

蘭：そそ オススメは？

メイ：えつとですねえ・・・上級者になつてくると 逆手持ちです
ねえ だけど 私オススメは 右が逆手 左が正ですねえ

蘭：ぐはっ ちょま 無理

メイ：これだと 左でガードしやすく 右の攻撃が理想的なんです
けど・・・

蘭：むう・・・ まあ ちよつと 今のところは 正でいいかな

メイ：最終的でいいんで 多分いいですよ

人がだんだんと集まってくる。

なーんか 初心者むき出しのやつばっか。まあオレもかなあ。
三人ぐらいかなあ 多分いけそうなの。

なんか オレのほうばっか見てる。やっぱオレもか。

メイ：多分その服のせいですよ？

蘭：ん？

この世界と 日本だとかなりファッションがちがう。

服も買ったほうが良かったか。

審査員：では ランクE昇格試験を受ける方はこちらへ お集まり
ください

ゾロゾロとまでは いかないが結構な人が集まった。多分20人ぐらい。

審査員：では 説明を始めます。これから皆さんには別々にワープ
してもらい。こちらで管理した「グラバリス」を討伐してもらいま
す。見事倒していただくとランクEに昇格します。それから――

めんどいから スルー。

蘭：グラバリスってなに？

メイ：知りませんねー

メイでも知らないことがあるのか。

全部知ってちゃ 面白くないか。

まあ 昇格試験だつていうぐらいだから つらいんだろうな。

審査員：では始めます。

シューーン

丸いフロア まさしく闘技場って感じ。

奥のほうに　オリがある。　やばいなー　あれ。

蘭：あの大きさからすると結構でかいだろ。

メイ：ですね。

アナウンス：では　開始！！

アナウンスの声と同時にオリが大きな音をたてて開く。

中からグラバリスが・・・って・・・

蘭：うええっ　でっか！

全長4mぐらいはある。紫色の鳥

蘭：これ勝てるの？

メイ：弱そうですよ？なんだから

蘭：どこがだよ！？

グラバリス：クエエエエ！

おうおう　でかい声　コエエ

蘭：まあ　びびってても仕方無いか。

武器に変換して　SBで様子を見る。

翼を大きく広げて　羽を100本ぐらい出してきた。

蘭：あれが　ランクEって　いきなり難易度・・・

SBは羽をくらっても勢いとまらず　そのままグラバリスの足を切った。

蘭：ええと　前言撤回

メイ：だからいったじゃないですか

グラバリスがもがいてる　ところにSB　3発うつて終わった。
シューーン

帰ってきて誰もいない。あんなのに時間くってるのか。

審査員：おめでとうございます ギルドカードをギルドカウンターに提示していただければ ランクEに昇格するので 後で行ってみてください お疲れ様でした

蘭：どもっ

本当にひょうしぬけだあ。

モニターにほかの人の戦闘シーンがうつっている。
あれ？グラバリス キックしたら人ふっとんでる。

羽食らった人 顔が青い。 あれって毒か？

蘭：うわっ

結構つよいな あいつ。

蘭：先手必勝した人の勝ちだろこれ

メイ：そ そうですね

あとでゾツとした 試験だった。

会場を出て ギルドに行くことにした。

08 ランクE

ギルマネ：ランクE昇格おめでとunggざいます　ここで　カードコレクションブックを差し上げます

分厚い本をもらった。表紙は六望星というやつ。三角と逆三角重ねた図形。

蘭：これ　なんですか？

ギルマネ：これは　カードを集める本です　たまに2枚ダブったりした時に　捨てたりするのは勿体無いので　これに入れていってください　20枚ごとにギルドから報酬が出ます

蘭：ほう　全部集めると何か？

ギルマネ：一応考えてはあるのですが　最高でも半分ぐらいしか集まった記録しかないんですよ　ですので相当容易ではありませんね　蘭：結局言えないと

ギルマネ：そうですね　こちらでも詳しい事は言われておりませんし　本部で仕切っていますので

蘭：おけい　把握

ギルマネ：では　ランクEの説明に入ります　ランクFよりもクエストの難易度が高くなり　ここからは　ソロ（一人）での狩りは難しくなります　せめて2人以上じゃないと辛くなつてきますね

蘭：うえ　まじか

もおそんなやつでてくのか。　厄介だな

メイ：まだ　蘭さんならいけると思いますけどね

蘭：まあ　反則キアラだしな

軽い説明を終えて　クエストボードを見してみる。

????：あのお

見ているところに声をかけられた。どつかで 見たことあんなあ。
????：さっき昇格試験受けてた人ですよね？

ああ できそうな子だと思っていた1人だ。 多分。

蘭：そうだけど なんですか？

????：今からクエスト行くんですけど 1人じゃ大変ばくて
それで 暇だったら一緒に行きませんか？

どうするか・・・ オレ1人でもいけそうだけどなあ。

断ったらダメぽ

蘭：まあ オレも1人じゃつらいし 行こうか

????：本当ですか？良かった！ 1人じゃ 精神的にも辛いし
寂しかったんですよ

まあ 1人じゃ寂しいよな 1人の女の子がモンスターを倒すなんて・・・ねー

見るからに ロープ着てるし 多分フォースてかフォースだろ。
ハンターって少ないのかなあ。

てか オレに声をかけるってことは 脈アリ？いやいやいや まて
こういうことは 考えてはいけない ナルシストっていうのじゃないか？

????：いきますよぉ？

やべ 自分の世界に入ってた。 集中集中。

蘭：おうけい

カウンターにもう 契約書を持っていつていた。 奈々っぽい子かなあ
と思ったけど しっかりしてるな。

てか 名前聞いてないや。

???：あつ えつと自己紹介してませんでしたね 私の名前はチロン・シルバーです

蘭：よろしく オレの名は 蘭 浅井蘭だ。

チロン：アサイラン?ここら辺だと 変わった名前ですね

いや 自分からしたら 君の名前のほうが よっぽど 珍しいんだけど。

蘭：って これって あやしまれてね?

メイ：一応 偽名にしたほうがいいですよ いまは逆にあやしまれますけど

偽名って聞くと なんか犯罪者に感じてしまうのは オレだけか?
蘭：ああ オレずつと東の国の者でさ ことは 少しちがうんだよね

チロン：いや でもかつこいいですよ? 悪いとは言ってます

やつぱ この子オレに・・・って 駄目だっていつてるだろう!?
オレの邪気消えうせろ。

メイ：蘭さん 心の中が グラグラですよ?

うん わかっている そんな事は分かっているが・・・
消滅 邪気は消えました。

うん わかっている そんな事はできないんだ。

メイ：蘭さん・・・聞こえてます?

蘭：お おう

メイに注意されながらも できるだけ 邪気をはらい ギルドのワープでモンスターのところにいった。

ランクEだと 5km内なら モンスター退治クエストのみ とばしてくれるらしい。

モンスターかぁ・・・

あとで 採集クエストみたいのあったら それやろう・・・モンスターばかりじゃ つかれてきた。

チロン：ここですねー モンスターは キッズレッドドラゴン略してミニアカドラです

蘭：微妙な略し方だな てか 一匹なんだろう？よゆ・・・

地面に黒い大きな影。

でっかい鳥みたいな影。

上を見上げる。

ツバサを大きくはばたかせて 降りてきた。

蘭：あれえ？

チロン：キッズですよ？キッズ・・・

見るからに10 12m。

キッズじゃない・・・絶対にキッズじゃない。

蘭：おお なんか大きく息吸ってる

いや まて あのモーションって・・・

チロン：フィル！

チロンに腕を引っ張られ すごい速さで移動。

頭の中で タッチの差、紙一重、ギリギリ、という言葉が 怖くなつた。

口からはいた 火の玉が地面を焦がしている。

チロン：大丈夫ですか？目がきよろきてますよ？ああ 今の魔法はスピード魔法フィルです そのことじゃないです？

蘭：うえ うわ ああ ありがと マジで。

チロン：んじゃ こっちも行きますよっ

この子すげえ 戦闘慣れしてる。

魔法を唱え始めた。 うつまで時間がかかるのだろう。

できるだけ なにかをしよう。 どうしよう。

まあ あいつよけないだろうし 色々考えても仕方ない。

S Bを放つ。 切れない。 いや 切れたけど かすり傷？

蘭：難易度あがりすぎ・・・

グチをこぼしていると

チロン：サンダー！

ドラの上に黒い雲が現れる。

その雲から 光の光線が…てかあれは 雷か サンダーって言うて
たし。

ドラ：ギャオオオ！

ジタバタともがいている。

めっさくさくらっとるがな。

チロン：蘭さん 次できめるんで 少し時間かかりますっ なので

時間稼ぎよろしくお願いしますっ

蘭：おうけい

とは言っただけど どうするかあ。

メイ：今回リンクあがったので マナはかなり増えてますよ？

蘭：武器はでてない？

メイ：はい

蘭：ああ…おけ

マナのコントロールってかなり難しい。

やばい 思いついた。 危険な作戦。

死にたくないなあ。 こええなあ

うるさい。だまれ小心。絶対に時間稼ぐ。

SG連射こつちにひきつける。

フィルの効果が少し残っていたので 打たれた方向みても いないよ？俺は

その隙に うしろにまわりこむ。

さあてと。マナが多くなつたなら。

マナをこめて切ると威力は上がる。そう武器を体の一部と考えてメイ：なんでそんな事してるんですか？

蘭：なんでだろう…

ああ マンガだ。

まあ 考えるな 感じる いける。

ツインを投げる マナをおびたやつなら 刺さつた。

普通の銃なら ジャム（つま） ったり安全装置が作動したり。

ならこれならねえ。 相手に突きつけながらうてるんだよ。

ささつたところに 走って ささつた状態でうつ。 体の中は や

はりやわらかい。 ありがちなモンスター。

ドラ：グワウ

少し暴れて ぬけてしまったので SBをやる。

かなりマナの威力が上がつた。

真空刃が すごい勢いで うろこを引き裂いていく。

上に跳ぶ ジャンプ力はんぱない。こつちの世界 重力小さい。

肩に うちこむ。軽い穴が空いたところに。

チロン：サンダー！

叫び声を上げずに 倒れこんだ。

終わった。。。 つつかれた。

チロン：おつかれさまでした。 蘭さん マナありすぎじゃないですか？本当にハンターですか？というか 最初からマナを多めに使つて あの真空刃つかつたら 半分に切れてましたよ？

そりゃあ 反則キャラですから。

蘭：ああ まだ 使いこなせてないんで

チロン：てか 蘭さん 魔法覚えてないんですか？ もったいないですよ？

蘭：魔法カードでたことないんよ

まだ一回しかクエやってないけど。

チロン：それは それで珍しいですね あまりクエストやってないですね？結構ですよ？

蘭：まじで？

チロン：私の場合はレアがでるまで 同じクエったりするんで。

蘭：レア？

チロン：レアっていうのは そのクエストでしか でなかったりそのランクでは 入手困難なカードのことです。このクエだと ファイアの次のファイアボールがでるんですよ。さっきのサンダーだって レアですし 図書館の本とか読めばわかりますよ？

蘭：そんなシステムあんの？

駄目だ この世界 頭を爆発させたいらしい。

覚えることが多すぎる。

おくの先に奥があるんだよ。。。 真実の先というのが。。。。

蘭：んじや かえるか。

チロン：はい

ギルドに行つて報酬をもらう。

こ これは ファイアボール！！

つていうベタなことは ありません。 絶対に。

いや まだあけてないけどね。

こういうベタのことがないよ。 って言ったあとに出るっていうのな

いよ。

ファイアとスパーク（サンダーの手前）今回も二枚
チロンも出なかったらしい。

蘭：カードって使っていいの？

チロン：いいですよ

二枚とも破ってみる。

うお 頭の中に魔方阵がうめこまれる感じ なんだこれ。

チロン：ああ 最初は頭いたくなりますけど 大体すぐ治りますよ。

魔法はつかえばつかうほど 強くなっていきます。最初はクラス

9 で だんだんとあがってきます。

蘭：うえ RPGの レベル上げみたいなの？

チロン：アールピージー？

蘭：ああなんでもない

この世界辛い。。。

帰りたい 微妙なホームシックになってきた。

心の中でグチをいいながら 1日は終わっていった。

09 コンビとコンボ

09 コンビ

今日は 露店めぐり

なんか 冒険者っぽい 服を買ってきける ゲームのキャラで だれ
だか忘れたが着てたような服。

なんか 似合わない。と思う。

メイ：似合ってますよ？

蘭：ホント？

メイ：ええと まあ 靴が服と ミスマッチですけど

ああ 本当だ。

黄色と 緑の 変な運動靴で きてしまったので 完全に痛い子み
たいになっちゃってる。

この世界 装備とかには 付与効果みたいのがある。

このダムバックだって 魔法がかかっているし 攻撃力が上がるや
つもあるらしい。

んなことで 黒い靴を買った。 なんか薄気味悪いので あまり売
れないとのことで 格安で うってもらった。

蘭：これ なについてるか わかる？

メイ：ちょっと 魔力は感じますけど…… わからないですね

蘭：むー まあ 安かったし たいした効果じゃないだろ

そんな感じに 服装をそろえて この町を出て行くと思う。

この町は あまり 大きくないらしく 治安も悪いらしい。

ってことで さっさとどこかに行ってしまうおうと。

チロンはここで クエストを大体終わらしてから いくらしい。

まあ あの強さなら なんの心配もないけど。

回りながら見つけてしまった。

そう チョコスナック
きの。の山と にているが ちょっとちがく スナックの部分だけで 食つても 充分うまい 仕組みで さらにチョコの甘さがでてくる。

蘭：日本でも作れよ

メイ：もって 帰ればいいじゃないですか

もって帰るつってもなあ 帰れるかどうかもわかんないのになあ。

まあ こっちの楽しみもあつて いいか。

ギルドにきました。ちがう町いくんじやないの？

つて思つてる方 いきますよ？

配達クエストをついでに受けに来た。

てかね モンスター退治どれだけ 疲れることか。

原始人 流石だよ。

で 発見。

グルーロに 荷物配達。 報酬はグルーロでもらえるらしい。

ギルマネ：んじゃ 明日までね

蘭：うい

期限があるのか。 やはり E なところはあるな。

そういえば 行く道中 モンスターとかをみつけたら 普通に逃げてもいいし 倒してもいいらしい。ギルドのリーダー？みたいので 数とか 大きさとかで 報酬を出してもらえるみたい。そんなのあるなら 商品化しろ。
道に沿って歩いていく。

蘭：ん？

少し道から外れたところに 人だかりができていた。
メイ：なんか すごいですね

少しのぞいてみる。

蘭：うわ……

顔が三個のどす黒い色のモンスターがいた。

人：おい！ ケルベロス相手に2人でいどんでるぞ！？

男の人が 声を張り上げている。

こういうのって 盛り上がるよねえ。

蘭：ケルベロスってなに？

メイ：このごろ 私のこと 辞典かなにかと間違ってますん？

蘭：いや そんなことないって メイって物知りじゃん？頼りにしてるよ

まあ オレこのごろ 聞きすぎだし しょうがないか。

てか 本当にわかんないからしょうがないと思うんだけど

メイ：確か ランクCの人が10人がかりでやっ倒せるほどの強さで こくら辺に普通はいませんよ 魔界の番犬といわれたぐらいです 魔界にいるはずですよ

魔界かぁ… 地獄みたいなところかなあ。

蘭：そんなやつ 2人で倒す…

ブワオオオオオ

ウツサ 多分ケルベロス。

狼の遠吠えよりも かなり怖い。

人をかきわけて前のほうで見ている。 本当に2人だ。

黒いローブと白いローブの男2人。オレより4つぐらい年上。多分。ローブかぶってて 見えにくいが。

ケルベロスは 舌を出して よだれをたらしている。 うえ 汚い

吐き気もよおす。

いかにも 食ってやる 俺は はらぺこなんだって感じに。
大きいなあ。まあ 見慣れたけど。

人：あいつが 持っている剣・・・

人：だよな・・・あれガンブレードだ！

黒いほうの もっている剣のことらしい。

ガンブレード？ どうかで聞いたな。銃剣かあ。

ああ ゲームのキャラで誰かつかつてたな 確か。

1・8 mぐらいの大剣 あんなの ふりまわせねえだろ。

かつこいいなあ まあ メイもガンブレードに近いか。

人：こっちは 八丁拳銃だ！

人：八丁！？ まさか 周りは戦場をつかえるのか！？

ガンキラーフィールド

8丁ってどうもつんだよ。って もつとる。

親指以外の指で引き金をもって 手の平のところで 四丁もおさえ
てる。。。手 でかいな。

あれ 撃てくない？ 撃てたとしても 反動でかいだろ。。。

とか 色々と 盗み聞きすると ケルベロスが動き出した。

その 瞬間 黒いのが 剣を構え・・・

蘭：とんだ・・・

地面から1 mぐらいのところを平行にとんどる。

すげっ スー。ーマンみたいな 感じた。

見えない速さの 切り刻み なんて あんな重そうなの 振り回せ
んだよ。そして 噛みつかれそうになったときに 口に剣をつっこ

んで 銃を撃って反動でバックして よける。

すげえ コンボ。

蘭：動き方が はんばないな

メイ：ですね しかも マナをためてますよ

蘭：マナをためる？

メイ：奥から引き出してる　みたいな感じです。

黒い男：死に向かう　カウントダウン（リミット　バースト）

言い方がかけーっ

ケルベロスの周りを　地面に書いた線でかこむ。

そして　ケルベロス足を足場にして　大ジャンプ。

その瞬間白いほう　撃った。

撃った弾は　飛び散った。　ああ　散弾だ。散った弾でも凄い速さで　ケルベロスに当たる。

足に無数の穴。　どんだけの威力だよ。

そして　撃鉄^{ハンマー}をあげて　その勢いで　空中にまわす。　それを等間隔に行い空中で回ってる銃を撃つ。　やっтерることが　速すぎて　手がダンスしてるようにみえる。

身動きがとれないケルベロスの上から

黒い男：ライトニング！

チロンのサンダーより青い色だった。多分サンダーの次の魔法。その雷を　ケルベロスに当てずに剣にまとわせる。　魔法剣ってやつだ。

そして　剣先をケルベロスに向け　発射した。

もお　弾というより　キャノン？　ケルベロスは消しとんだ。

全体から拍手　オレもいつのまにか　拍手。

2人は　ハイタッチをしてワープした。

かけーっ　いいものみたなあ。

蘭：あんな　コンビほしいなあ

メイ：お仲間さんが　いるじゃないですか

蘭：うーん・・・　なんかあつちは　2人で組んでそう

メイ：フォース同士だと　合体魔法がありますしねえ

蘭：てか　こつちの世界の人と組みたい　なんだか

そんなやついんのかなあ。

まあ 旅してれば 会えるだろ。

そんな 話をしている間に ついた。

本の町 グルーロ

町の中央には 大きな図書館があり、 その他にも 貴重なスキルブック 発達した技術 カードの集め場とまで言われている。

メイ：って パンフレット 音読しなくていいですよ

蘭：あれ 声でてた？

メイ：はい はっきりと

まあ 説明だよ 説明

メイ：そんなだけ 楽しみってことですね

蘭：まあな

配達の商品を届ける。

家からでてきたのは 大きいごっつい おじさん。

男：おう ありがとうな 娘からのプレゼントなんだ ありがとう
ギルドに報酬は渡してあるから いつか とりにいくといい

なぜか 握手をした。 父さんのような大きな手。

父さん元気かなあ。

母さん 心配してないかなあ。

やばい 帰りたくなってきた。二回目のホームシック

と 言いつつ チョコをかじる。まあ こっちの世界も捨てたモンじゃないよ。

うん チョコあるし。（結局これ）

今日は 歩き疲れたので 寝る。
ねむう・・・

10 調合（前書き）

ついに二桁ですっ

これからがんばりますっ

10 調合

10 調合

蘭：トーナメントか

ギルマネ：Eで挑むのは辛いけどね

報酬をもらったついでに ギルマネが開催されるトーナメントについて説明してくれた。

Fは参加できず E Cまでの参加らしい。

シングルバトル チームバトルとあり、 シングルは言わずもがな。チームは2人一組だそうだ。

ギルマネ：まあ 五日後だから ゆっくり考えてね その間にクラスアップとか すればいい試合できるしね

蘭：うーい

まあ やるとなると3回戦目ぐらいはいけるだろ。

メイ：Cまで出場となると 下手すると1回戦目落ちもありますよ？

蘭：軽くレベル上げしなきゃな

街のくねくねした道を歩いて すっごく楽しみな 図書館に行く。

の、はずだったのだが・・・

行く道中に変なのに出くわす。

オレと歳が同じぐらいの男がチンピラ3人からまれている。

あれだ。カツアゲだ。

まあ・・・

スルー。

男こっち向くな やめろみるんじゃない。

うわ 男の目線に気付いてチンピラこっち見やがった。。。いやあ
フラグ成立

チンピラ：あいつ お前の仲間か？

チンピラが男に質問しやがった。これってさあ・・・

男：いや ちがいます

ナイスだ！ お前のことは少しの間は忘れない。

ってことで オレはそのまま行ってしまう・・・

チンピラ：嘘だな ずっと見てたじゃねえか！

おいオイオイ 何勝手なこといつてるんだよ！？ お前はそんなに

ベタなことがすきなのか？ 見てただけだろ？

ていうか こっちくんない！ やめろメンドクサイ。

蘭：いや 自分はちがいますよ？

精一杯の平常心の言葉。

いや まて なぜお前は ドスをもつとる！？ チンピラだろ？

ヤクザじゃねえだろ！？

聴こえた？オレの声。自分無害者。

きりかかってくんない！ 蹴るぞ？いいんだない？

足に回し蹴り。普通にチンピラこける。てか 骨おれたんじゃないー

いの？ジャストミートしたし。 いやあ 体術強くなったなあ。

蘭：いや 今の正当防衛

チンピラ：こいつ！

そう 1人目倒すと 2人目が声を張り上げながらくる。 なんと

もベタな。

はい。腹に正拳突き。

音もなく 倒れる。 かつこいいね オレ。

そして 決めポーズ。 あ。ドラゴンのときにやってねえや。

てか この説明短かったからさ。 もっかいおさらい。

おでこらへんっていうのは　もみ上げのらへんから　横にはなすんだよ。

三人目は　ヒィイとか声を上げながら　逃げていく。　もあベッタベタ。

男：どうもです。　助けてくれるなんて。

蘭：いや　でも君は　助けてほしいとは　いつてなかったけどね。

男：なにいつてるんです？　助けてくださいって言ってるのに助けてくれたほうがいいじゃないですか

地味にいいこと言ってくれてる　こいつ。

蘭：ま　まあ当然のこと　したまてだよ。

決まった。　もあキメキメ。

メイ：蘭さん　キャラが・・・

いや　なんか言いたくなった。　うん。

てか　オレってもあ　キャラきまつてんだ？

メイ：・・・反則キャラです。

そういえば　そうだった。　ってちがうでしょ！？

なに　ノリツツコミしてんだ　オレは・・・

男：あの　自分ルウっていうんですが　趣味で　調合してて…それでライフポジションっていります？

調合が趣味・・・どっかの博士？

蘭：ライフポジション？　回復すんのそれ？

ルウ：はい　HPの回復をする薬です。　少し苦いですけど　これです

差し出された手にもっているのは　赤くて血のような色。

もあ　みるからに栄養ドリンク。　赤マムシドリンク。

蘭：本当に回復すんの？コレ
ルウ：一応しますよ。

少し不気味な 笑みを浮かべたように見えたのは 見間違いだろう。
体力ねえ。

少しなめてみる。

蘭：につつが！！ なんじゃこれ！

ルウ：そうですか？

おもしろがって笑っている。くそお おとなしいやつかと思ったの
に。

蘭：戦闘中これ飲めないだろ！？

ルウ：飲む人なんて ごくわずかですよ。 カードにして使えるん
ですよ。

蘭：それをくれよ！？

ルウ：いま持つてないです。

こいつは 何なんだろうか。

てか また名前蘭って 教えちまった。 偽名考えなきゃなあ。
話していると こいつも図書館にいくらしい。

蘭：んで なんてつかまつてんの？

ルウ：普通に歩いていただけ。 運悪くそのときに 変なポーショ
ンのんじやつて 力が通常の10分の1になっていたんで。 普通
ならわけないんですけどね

蘭：ふーん なんか自分が強いとかいつてるように聞こえるが？

ルウ：あの チンピラよりはな。 一応オレはランクCだぞ？

蘭C！？オレと同じくらいなのに

世界は広い・・・ここは異世界は広い。

広い・・・こっつてどれくらい広いんだろ。

まあ 図書館いけばあるだろ。
つてことで ついた。
蘭：で でかすぎる

国立国会図書館ぐらいある。なんつーでかさ。。
まあ 国立図書館は18才以上だから入ったことはないんだけどね。
中も 本棚がぎっしり。
落ち着け こういうのは コンピューターで検索できたりするはずだ。

・・・PCすらない。

ルウ：きたことない？

蘭：ない 広すぎて 本の場所わかんないだろ

ルウ：カウンターにリーダーあつたろ？ 使えよ。

蘭：リーダーなんてあんの！？

それらしきものあつたっけなあ。

一応きてみたが やっぱない。

蘭：あいつ また だまし・・・

カウンターの横にあつたあ・・・

カードかよ・・・ わかるかつ 普通。

50リルだつてさ。

そういえば 1リル＝1円ぐらい パン（みたいなもの）が80リルで買えたから。

ついでなので 2枚かって ブックに入れてみる。

表紙の裏にいれるところがあつて そこにいれると 消えた。

他のページに移動した。 便利な機能だなあ。

でカードの右上に数字があることに気付いた。

これって・・・カードの番号？

蘭：634!？

カウンター：お静かに
蘭：あう すみません

これって 少なくとも634枚あんのかなあ・・・
全部なんて 絶対無理じゃん。。。

まあ せめて100ぐらいは 集めたいなあ。
ん？でも・・・

一回のクエストで3枚ぐらいだろ？

30回はしなきゃか・・・

まあ 集め終わる前に 帰れるだろう。多分。
リーダーをやぶる。

たんま・・・すげえ勢いで頭痛がくるんだけど・・・
20秒間じたばたしている。

蘭：ふほあ くはあ

メイ：大丈夫ですか？

蘭：ああ 治った

すっげ どこにどんな本があるのか簡単にわかる。
これって図書館よりのカードか。

ってことで まずは地理。

でっかい 地図みたいのが たたまれている。

蘭：ん？

途中から開かない・・・のりでくっついてるみたいに。

蘭：これもランクが影響してんの？

ルウ：そだよ

いつのまにか横にいる。オレはメイに話したんだよ！

ルウ：厳密に言っと 魔法のクラス ランクの階級 そいつのステ
ータスだな。

ルウが本をとって 開く。そしてそれを床で広げる。

蘭：うわ でかつ

日本で言うところの ジャ。プぐらいのやつが 1?ぐらいになった。

蘭：ってか こんなに広いのか

となり町のルーナサだっけ？そこからここまでの道が せますぎて
見えないぐらいでかい。

メイ：こんなに 大きいの初めてみました

蘭：・・・ハア なんか疲れてきた

ルウ：なんで？

蘭：全部 町をいかなきゃ 帰れないような気がする

ルウ：かえれない？

ああ・・・口がすべった。

蘭：オレ親に全部の町行かなきゃ 家にいれないって言われて お
いだされたんよ

ナイス オレの思いつきっ ベタ だけど

ルウ：気がするって言ったろ？

・・・こいつめ。

ルウ：てか蘭 お前ってあれだろ？ここの世界の人じゃないだろ？

黒髪 黒目 耳も変。

観察力たかいなあ・・・

てか こっちの世界の人 耳とがつてるから そこで駄目か。

黒髪もだめかあ・・・ 染めるしかないかなあ・・・

蘭：はあ・・・うーん・・・じゃあ 話すよ・・・

もお　メイに言ったように全部。

ルウ：ハアゝ　だからお前Eのくせにマナ多いのか　その地球てとこころはすげえな

蘭：あまり　言うな

ルウ：あまり知られると面倒だもんな　まず帽子で髪隠せ　それが染める　耳は帽子で隠してもいいが　中々ないから　髪伸ばして隠す　目はあまりばれにくいから　いいだろ

蘭：うい

地図は行ったことない町はどうだっていいし　説明があれば見たんだか　それもない。大きさが分かれば充分だろ。

つてことでね　調査をしてみたいんよ。

それでね　調査書が　分厚いんよ。軽く流しながら読む。

調査は　緑の木の実をベースとし　その他の木の実を混ぜて　作るらしい。

赤い木の実と緑の木の実を混ぜるとライフ

青い木の実と緑の木の実でマナ

これらに　白い木の実を混ぜると　効果アップ。貴重なので　あまり見付からない。

かなりの種類があるが　クラス低いからか　読めない　意味が分からない。

ルウ：調査してみる？

蘭：ああ　うい

この「調査書第一版（絶対に使える技術）」を借りていく。

ここの貸し出し期間は　無制限らしい。

しかも20冊まで。　分館にスペアがあるらしく。　だけど　ギルドカードに明記するのであまりに長いと連絡や・・・知らん。

んで 用意するもの 調合キット。

蘭：だけ！？

ルウ：あと ファイアの魔法だけな。 ファイアは大体のやつがも
ってるしな。載せてないんだろ あ 材料はいるぞ？

蘭：へえ

露店を見てまわる。店で買うと高いらしい。

ルウ：まあ パチモンのときがあるが こっちの方がいい。属性が
ついてるときがあるしな

蘭：パチモン？ポケモン？

ルウ：パチモンな ポケモンってなんだよ 偽物とか傷つきモノとか

どこの方言だよ。

ルウ：ん？

蘭：ああ これか

ルウ：いや そうなんだが

おばさん：これは 私が作った完成版だよ

ルウ：やはりか いい出来ですね

蘭：キットってつくれんの？

ルウ：ああ スキルとか魔法があればな

蘭：ほお

なーんか 複雑なもんも 作れんだなあ

ルウ：完成版しかも号は10337 普通のキットと比べモンにな
らないぜ？

蘭：よくわかんないけど すごいんだ？

おばさん：まけとくよ？

ルウ：む

蘭：ありがとうございます

でも5万リンかぁ 今持つてるリンの半分は使うなあ。

ルウ：買つとけ 俺も買う。普通に30万リンはするぜ？しかも
こつから安くしてくれるなんて

蘭：はぁ！？ばあちゃん やっていけないの？

おばさん：原価の安い材料で作ってるからねえ 一応黒字だしわ

たしや お客さんの 笑顔がみたいんよ

なんていい人なんだ 日本の皆さん これをみていますか？

蘭：パチモンじゃないんだろ？

ルウ：絶対に大丈夫

蘭：んじゃ買う。 その横の黒い本も

おばさん：ありがとね ンじゃ2つで5万でいいよ

蘭：まじっすか！？

なんつて 気前がいい人なんだ・・・

ルウ：んじゃ これとあれと・・・

なんか たくさん買つとる。

おばさん：はい おつり 調合するんかい？ 材料を持つてきな

とりすぎて 困つてたんよ

ルウ：おお ありがと 探す手間が省けた

蘭：本当にいいんですか？

おばさん：いいよいいよ

涙がでちゃうほど 優しすぎる。

お礼をもう一度言つて 近くの公園で調合をやってみる。

蘭：この世界っていい人ばっかだな

ルウ：おま オレさつき からまれてたよな？

蘭：・・・一応 前言撤回

ルウ：一応かよ

タルごともらつた木の実とキットをバックから取り出す。

ルウ：お前それ ダムバック？ よくそんなモンもってんな

蘭：ああ チョコ買ったおっちゃんからもらつた

このバック無かつたら 昔の服入れられなかつたし 荷物おめえし
しかも入るところは広がるし こんなでかいタルも入るし 泣け
てたなあ。

ルウ：今の相場 130万はかるいぞ？

蘭：・・・はい？130？

ルウ：万

蘭：・・・はい？

ナンダツテ？

メイ：ダム 覚えてる人少ないつて言つたじゃないですか。普通あ
りえないんですよ

蘭：ええええ！？そんなもん もらつていいのか！？返してきたほ
うが・・・

ルウ：たぶん もおいないし もらえるモンは もらつておけ

蘭：すげえなチョコ屋のおっちゃん

メイ：チョコ屋ではなかつたですけどね

ダムバック・・・ありがとう

ルウ：まあ やるぞ

本を読みながら HPポーションを作る。

キットの中つて 色々はいつてんなあ。

まず 赤い実と緑のみをつぶし 変な容器の中に入れると 自動で
混ざる。

あと、80 の熱を加える。

蘭：80 って・・・

ルウ：これぐらいな

片手に火を集めている。

蘭：これぐらいか

大体の大きさをつくり 微調整

ルウ：大きさはソレ 威力がちがう 色がちがうだろ？

蘭：威力う！？出力がちがうのか？

ルウ：ちげえ 練りが足りないんだ

わかるかつ クソ

ルウ：まあ クラスが9じゃな 今日だけオレが出してやるよ

蘭：いや まて それは なんかイヤだ

ルウ：へんなところで 意地はってんなあ 頼れよ

蘭：木の実つぶす作業が楽しいかあ？

ルウ：そう・・・だな

蘭：まあ ファイア強くなってからだ 木の実没収

ルウ：うええ ひつで

今日は結局調合しなかった。

明日から魔法の練習もしよう。

11 Cの実力（前書き）

アクセス2000やつと超えましたw
どんどんみてくださーいっ

11 Cの実力

11 Cの実力

はい クエストです。

モンスターはいやだと 言ったのに・・・オレはいったのに・・・
ルウ：ブックが1枚！？しかもリーダー！？アホか！？

そんなに エクスクラメーションマークとクエクションマークい
んでもいいじゃないか。

蘭：だつてさあ 俺 配達1回と モンスター退治2回しか・・・
ルウ：2回！？それで イヤとかいってんの！？てか なんでそれ
で Eランクなんだよっ

ひどい言われようだっ

蘭：はいハイハイ 分かりましたよ

ルウ：なんで そんな偉そうなんだよ？

つてことで カード集めです。

露店でね カード買うのはリルの無駄つてことで クエストで集め
る。

蘭：カードねえ・・・

ルウ：なんだよ

蘭：これ作った人つて すごいなあと

ルウ：まあ 特別な装置とかだろ 多分

蘭：んじや その装置作った人だな

ルウ：そんなこと考えたことなかったな

まあ 生まれたときから 日常で使っただろうしな
ルウ：さあ んじゃ 適当に集めつつ レアを狙うか
蘭：おう

カウンターに持っっていたのは ボスラッシュ。

メイ：ボスラッシュですか・・・

蘭：なにそれ ボスがたくさんでてくんの？

メイ：まあ そんなようなものです

ルウ：いけば わかるっつの

ワープ装置でワープする。

目の前に黒い もさもさした・・・

蘭：うえええええ！？

すごい速さで後に下がる。

ルウ：なにやってんだよ

蘭：そりゃ 目の前にでつかいくま いたらビビルっしょ！？てか
一匹しかいねえじゃん

ルウ：ああ 順番ででてくるから

とか 言いつつ 白い槍をとりだしている。

例えば ルウの精霊は 白い狼だそうで。

ソレをクマの首元に投げる。

あばれている クマをよけながら ささった槍を持って そのまま
したに 切る。

エグイやり方 するなあ。

半分に切れたクマは そのまま倒れた。

蘭：俺 なにもやってな・・・

ルウ：次 上からだと思うから

上からって聞いたからには 鳥とか竜かと思つたのに。

蘭：火の玉だあ 幽霊じゃん

ルウ：ユウレイってなんだよ あれは 鬼火だぞ？

蘭：知らない？ 実在しない人？ つか 鬼火ならますます 幽霊
じゃん。

ルウ：ますます わかんね

蘭：まあ あういう感じの

S Bを放つ

蘭：・・・

ルウ：あいつ 魔法じゃないと シナネエよ？

蘭：それは 先に言うことだろ！？

半分に切れて 合体。

セツケー。

ルウ：まあ いわなくてもわかるとおも・・・ケラケラ

コイツハアトデブチノメス

ルウ：ジャビン！

水の柱をつきたてた。 ジャビ系（水系）魔法だつてさ。

「ヴェラリルの初級魔法全集（初心者必見）」から。

その瞬間 地面が揺れた。

蘭：あわわわわ地震！？

ルウ：ちげえちげえ

地面からでっかい角をもったモグラが出てきた。

あんな 角ささったら シネルナア。

蘭：今回はいけそうだな

手からマナを送りこむ ついでにファイアも。
蘭：FSB！！（ファイアーソニックブーム）

やっぱ 技は叫ばなきゃねえ。

昨日 部屋で やってたら できてしまった。

ベッドが 燃えそうになったのは 秘密だ。

まっぶたつ。 巨大な キャンプファイアーになっとる。

ルウ：魔法 武器におくれんの？

蘭：昨日できた

ルウ：世界が違つとスゲーな。 普通は 発動して 直に武器に当て
るんだが

蘭：お前 できねえんだ？

ルウ：うっさい

まあ 反則キャラだしな。

ルウ：次ラストな

蘭：うーい

ラッシュって言つても 4匹か。

地面に黒い影が現れる。

なんか 前もあつたなあ・・・ デジャヴ？

ルウ：おお レアモン一発で きたかぁ ブラックドラゴン

蘭：色々と聞いていい？

ルウ：かるくなら

蘭：レアモンって 弱くないの？

ルウ：逆に強い

蘭：行くときに言つてた レアって こいつのこと？

ルウ：カードも

蘭：あれ 勝てんの？

ルウ：余裕

蘭：おうけい

うーん・・・でかいなあ

倒せネエなあ 俺じゃ

S B 連発。もお 乱舞。

すげえ 勢いで 切り刻む

片足 切れた。ああ いけんなあ

B D：グワオオオオ

蘭：ふはあ なんだ よゆ・・・

足元がぐらつときた。

ルウ：よく きれたなあ ほれ マナカード

投げられたカードをやぶる。 すげえ 回復力。

ルウ：Eじゃ 絶対逃げるぜ 普通

蘭：しらねえよ

ルウ：あと マナの使いすぎは 精霊にも負担あるぞ？

蘭：まじで！？

メイ：蘭さんは まだまだ 奥にマナがあるんで 大丈夫ですよ？
てか化け物ぐらいです。

蘭：化け物・・・

流石 反則キャラ。

ルウ：まあ 休んでろ

蘭：やれんの？

ルウ：お前とは ちげえよ

ゼツ テエブチノメス。

ルウ：サイクロン

ドラゴンの周りに 風が うずまいている。
ルウ：トルネード

ウロコを削って 少しずつ 傷つけている。

蘭：あんな 堅いのが……

ルウ：ハリケーン！

デカイ竜巻が うなりながら 攻撃している。

蘭：前が見えない……

風のせいで 目があけていられない。

台風が 凝縮されている感じ。

風がやんだ。

目の前には ウロコがはがれて ブラックじゃなく でかいトカゲ
みたいになっとる。

蘭：すっげー

ルウ：久しぶりだなあ ハリケーン

終わったので 帰る。

黒いパックが すげえ多い。

蘭：こんなにかよ

ルウ：まあ…… ブラドラだったしな

適当に出してみる。

蘭：この ひかってんのレア？

ルウ：おお スランフィルか。まあ 説明するより 後で 使ってみ

多すぎるので あとで 宿でじっくりあけよう。
疲れたので 寝る。

ルウ：はあ？ まだやるだろ？

蘭：．．．．．

まじか．．．．．

12 一回戦

12 一回戦

結局 昨日は ボスラッシュを3回やった。

まあ 一回目の時にしか ブラドラでなかったし レアもスランフイルのみ。

いや ルウは教えてないだけで 出たかもしれないが。

ってことで レベルも上がったと 思うし。トーナメントにでよう
と。

せめて 参加賞をとろうってことです。ハイ。

マルチは……

「お前とじゃ いいとこまで いけないつつの」
って 言うんで あきらめる。

ルウ：まあ 今回は黒白が勝つだろうしな

蘭：だれだそれ

聞いたこともないし……まあ まだ 知らないことが多いし

ルウ：黒いローブと白いローブのやつで 二人でPT組んでクエス
トしてるぜ

蘭：ああ あの人達か この前 ケルベロス狩ってたな

ルウ：そか Cのやつでも かなりギルドから頼られるやつらなん
だが そいつらが 今回は できるらしい

蘭：あの人達Cなん？

あの強さだと Bとか Aとかいってそうだしな

ルウ：一応な 今Bは 3人しかいないんだぜ？ てか ケルベロ
スなんて でてんのか 魔界が開きはじめたか？

魔界・・・最近よく聞くなあ あれか 魔王とかいんのかな

蘭：魔界なんて 本当にあるん？

ルウ：まだ 証明は されていないが 過去の勇者の記録を見ると
魔界ってやつは あったっぽい まあ 関係はまだないだろ

蘭：勇者ねえ・・・

ひびきは いいけど その勇者って 死んだらしいし 記録なんて
うそっぽだろう・・・

ルウ：・・・ よく考えると お前も勇者なんだよな・・・
蘭：ん？そなの？

そんな だいそれた タイトル最初からもってんの？
ルウ：だって この勇者達は 異世界からきたやつらのことだぜ？
ってことは お前もそういうことだろ

蘭：ああ・・・ よく考えると そういうことだよな・・・

なんで この世界は俺たちを選んだんだ・・・
どう考えたって もっとたくさんいるじゃん せめて スポーツで
きるやつとか頭いいやつ よびおこせって
アナウンス：シングル１２組の試合を始めます 選手の方は 待機
室にいてください

蘭：お 俺か んじゃ いてくるわ

ルウ：おお いったらっさい 勇者様

蘭：お前 あとで ブチノメス

相手 いきなり 前大会優勝者みたいなことは ないことを願おう。
。。。

ステージに上がると 歓声が上がる 俺なにもしてないっての。
この ノリはどこから くるのか。

相手は 赤っぽい鎧をしてて なんか いかにも・・・

相手：ククク・・・

狂ってそうなやつ。

相手：5秒で殺ってやろう・・・

うん 無理だと思うよ。

まず 試合開始前から マナためてるし

審判：では 始め！

相手：ファイアボール・・・はっはっは 死ネエ！！

でっかい 火球がとんでくる・・・

でもねえ・・・ 最初のマナの感じからしてさあ・・・

蘭：SB！

真空刃を細かくして あとかともなく 火の球を消した。

観客：おお！ ピーピー パチパチ

いろんな 歓声に手でうけこたえを試みる。

なんか 最高っ

蘭：あのー 5秒たったよ？

相手：ほざけえ！

ああ 人をおちよくるのっていいね。

純を久しぶりにおちよくりたいなあ。

多分 俺 ドがつくほど S

また ファイアボールをためはじめる。 馬鹿だなあ・・・ ためが長いよ。

SGを杖に撃って 地面に落とす。

相手：んなっ！？

蘭：ばーか ためが長いっつの

相手：う・・・うるさい！

ああ・・・ 本当の馬鹿だ・・・

懷から ナイフをとりだして 突っ込んでくる。

メイをツインから もどして 素手で 下あごをパンチ。
足が くらつとしたように 倒れた。

審判：勝者 スター！！

観客：わああああ！！

偽名はスターにした。 思いつくのが それだけだったし。
いいね この響き 最高。

ルウ：おお おつかれ

よし この 腹立つ 笑顔にもパンチ。

ルウ：ぶふっ んなにすんだよ！？

蘭：ん？ぶちのめすつつつたろ？

俺は 言葉は大体忘れない こういう悪口は 特に。

蘭：んじゃ 図書館いつてくるわ

ルウ：んでだよ 俺の試合みねえの？

蘭：んだって 勝てる試合見る気しねえし

つてか この観客席 かたすぎて しり痛いし。

ルウ：暇なら みろよ

蘭：うえー・・・面倒

ルウ：次の試合だし ファイアの練習でもしながら 見てろ

蘭：んー わーったよ

ファイアの基本的な練習は 指の先で ファイアをだす。
たった それだけのことが ここまで 難しいとは・・・
5本の指全部 やれなくては 全然駄目らしいが・・・

3本目終わったあとの4本目をやると1本目が消えてしまう。

まあ マナのコントロールの練習にもなるらしいし 一石二鳥でいいけどな。

アナウンス：シングル15組目・・・

ルウ：おっ きたか

アナウンス：東側のクラー選手が不参加で 西のルウ選手の不選勝です

ルウ：うえっ まじか 今回不参加者 多いな・・・

蘭：・・・さあ いくか

ルウ：ちょまちよま この調子だと多分 このまま 二回戦とかトーナメント組みなおしとか・・・

アナウンス：この度は グルーロトーナメントにお越しくださり・・・（中略）・・・ 今 不参加者の多い問題があり 調査中です。

選手の皆様 観客の皆様は そのまま お席でお待ちください。

大変ご迷惑をおかけしますが よろしくお願いいたします

ルウ：・・・

蘭：俺 ファイアの練習してるわ

ルウ：まてよ これが 変だと思わないのか？

蘭：ん？トーナメント組みなおすだけだろ？

ルウ：ちげえ 棄権者ならともかく 不参加者が多いってことだよ

蘭：それが どうしたよ

ルウ：このトーナメントは 参加すりゃ 参加賞もらえんだよ。だから 棄権者は参加賞もらえんの

んー・・・ いやぁ なんか 変な予感する。

蘭：あれだ 連絡する 暇もない用事が・・・

ルウ：こんなにか？多すぎんだろ ってことは なにか裏でやってるやつがいるって可能性があるかもしれないだよ

・・・フラグ成立

蘭：・・・が？

ルウ：調べようぜ？

ぼそつとフィルを唱えて逃げる。

走って逃げてみたが 目の前に風がおこり 反発で さつき座って
た イスにひきもとされて 頭にあたった。

蘭：いてえ！？

ルウ：逃げるのが悪い

蘭：主催者に任せろよ！？

ルウ：あれだぜ？ ここで 注目浴びれば もどれる方法がみつかる
かもしれないぜ？

蘭：可能性ないね やりたくない

ルウ：いいじゃねえか 席に座ってんのも退屈だろ？ ハリケーン
はなつよ？

蘭：退屈ちゃ 退屈だけど・・・スランフィルはなつぜ？

ルウ：ランク9の魔法に負けるはず無いね

なー せこい・・・

蘭：はいハイハイ わかりましたよ

昔にやった 宝探しを思い出した。

昔とは ちがうぐらい 推理小説読んでるけどな・・・

13 いつのまにか（前書き）

だんだんと アクセス 増えてきましたw
ご愛読 ありがとうございます。
感想 おまちしておりますw

13 いつのまにか

13 いつのまにか

やるからには、やる。

結局ルウの推理「ゴッゴ」に付き合わされることに。

まず、カウンター（選手受付）に行ってみる。

蘭：なんか 慌ててんな

奥の人は 内線で 連絡をとってたりと 変な慌て方だった。

ルウ：やっぱ なんかあんなあ

蘭：だな

その あわててる所から こっそり 近づき ちゃっかり 参加者
名簿をパクってくる。

ルウ：いいのかあ？

蘭：知るか きこえんっ

その名簿の名前のところに チェックマークがついている。

多分 不参加の人。ざっと20人

さつき ルウの相手のクラーって人についてるから 多分そう。

ルウ：これってさ 全部 東側の選手じゃね？

蘭：ん？どゆことよ

ルウ：このトーナメントって 対戦表の左が西 右が東なんよ

蘭：ほほお

名簿をもう一回見てみると 本当に東の選手だ。

蘭：なんで とぎれとぎれ なんだろうな

ルウ：知らん 強いやつだけ さらったんじゃない？

蘭：さらってるやつが いるかもわかんないじゃん
ルウ：まあ 一応 左側調べてみようぜ

ついでに この建物の地図も借りていく。

いつとくけど 借りていくんだからね？盗んでいくわけじゃないんだから！（ツンデレ風に）

ちゃんと 後で返すよ ウン。

行ってみると 関係者らしき人が 慌しく動いていた。

席に座ってるって言われてたので 多分見付かると やばい。

つてか 見付かると 犯人扱いかも知れない。

関係者（男）：そっちもないのか

関係者 2人が話している。 よく聞こえないが 壁にかくれつつ 聞いてみる。

つてか これが 壁に耳ありってやつだな。 うん。

なんか スパイみたいで 楽しくなってきた。

関係者（女）：なんで いないのよ・・・10人で探してるっていうのに・・・

関係者（男）：知らないよ そんなの

関係者（女）：不参加の人 全員いないなんて・・・

ん？全員 いないのか。

ルウ：んー これは 誰か さらったり してるやつが絶対いるぜ？

小声で話し合う。

蘭：でもさ アナウンスから 40分ぐらい たってるぜ？これで みつかないんだから もおここにいない確率たかくね？

ルウ：逃げられないだろ ここにくるのに 観客のところを通らなきゃいけない だから約20人ぐらいを 誰にもみられないってのは 不可能だ

蘭：1人 ずつとかは？

ルウ：それだと その犯人も一緒にいくだろうから 20回行き来
することは むずいだろ？

蘭：なーる

こいつも 推理小説とか 好きだろうな 多分。まあ図書館いつ
めてるらしいし。

蘭：だけど 40分を10人で探していないんだろ？

地図を壁にはつてみる。

ルウ：隠れそうな ところはないなあ

蘭：なんか 透明になれる魔法とかないの？

ルウ：あるっちゃあるが ハイドってやつなんだが 1人専用なん
だよ

・・・

蘭：ワープは？

ルウ：ああ・・・ だけど あれは王家の人とか 特別な人しか も
つてないな・・・ 売ってるのもみたことないし うってたら かな
り高いだろうな

蘭：一応 あるんだな？

ルウ：その可能性は ほぼないって

蘭：んー・・・

全然わかんない。

正直に言おう・・・ 難易度高いつす。

地図を壁から とるときに・・・

「ばん！」

音を立てて 横にあつた 絵が手にあたって落ちた。

蘭：げ 気付かれた？

ルウ：いや 大丈夫だろ

蘭：ふう・・・てか この絵高そ・・・

ルウ：壊れてないから 大丈夫だろ。

心臓が ドクドク言ってる。

この感じ 脱獄した 囚人っぽい。

落ちた 絵を元にあつた・・・

蘭：ん？

あつた位置に 変なボタンがあつた。

ルウ：これってさ・・・

蘭：いや 押したら 警報みたいのじゃ？

ルウ：かくし部屋の可能性もあるぜ？

蘭：だよなあ

赤いボタンって かなり怖いんだが

まあ 隠してあつたし・・・

震える人差し指で押した。

壁が トビラぐらいの大きさ倒れてそこから 階段が出来ていった。

ルウ：ビンゴ！

蘭：うわぁ すげえなあ

おそろおそろ 降りていく。

暗い階段を下ると 明るい広間にでた。

使われていない感じはあるが ごくわずかに 人が来たあとがあつた。

蘭：地下部屋かぁ

ルウ：昔のやつかもな 地図にのってないし。

それでも 人はだれもない。

だが 奥に扉があつた。

蘭：・・・あけんの？

ルウ：馬鹿か やめておけ

そつだよな 少し 様子をうかが：

「がちゃ」

蘭：うおい！あけるなら 言えよ馬鹿やろう！てか 開けないって
言つたら！？馬鹿やろう！ついでに もひとつ馬鹿やろう！

うん。すつきりした。

ルウ：お前が 開けると 危ないから やめておけっていったんだ
よ！ついでに ハリケーンくらうか？ええ！？

蘭：そつちかよ！？つてか 慎重にはいれよ！？てか くらわねえ
よ？即行にげるよ？

？？？：お前等 ここで 何を・・・

ルウ：うつさい その間に 対策たてられたら どうすんだよ！？

蘭：お前つて以外と短気なんだな！？

ルウ：なに 言つてんだ お前のほう

？？？：どうやって ここま

ルウ：だまれえ！ ハリケーン！！

なんか 横で うるさかったやつが ハリケーンの餌食に。

こいつ やっぱ 短気だ。ウン。カルシウムとれ。

蘭：てか こいつ なに？

ルウ：ん？知らん

落ち着いて 中を見てみると 不参加だと 思う人たちが・・・
寝ていた。

蘭：は？なんで ねてんの？

ルウ：ああ これは 睡眠魔法 スリープだな。

蘭：ん？ 寝かされてんの？だれに？

ルウ：多分 こいつ？

さつき ハリケーン受けたやつ。

蘭：ん？ってことは こいつ犯人？

ルウ：・・・だな

いつのまにか 終わった 推理だった。

オマケ（前書き）

今回は短かったので 少し オマケを書いてみました w

オマケ

オマケってか 今までの あらすじ

なんか よくわかんないけど 三人でファミレスに行った時にトビラに入り 異世界にはいる。

よく考えると 助けてって言うてたのだれなんだろう。

このファミレスでの ある出来事で 異世界に入っちゃってるんだけど 分かった人いるかな。

まあ 後々でてくるので。

トビラをはいると なんか説明をつける。金髪の変な帽子の女の人に。

あれも 後で 関係あるんで 1話を読み返すと ある意味 おもしろいかも。

そのあとは ワープされる。

ここで 登場する 首飾りで 精霊をとどめることが できるんだよ。

あれ？リストバンドは なんなんだろうね。

歩いて 奈々が 休憩したいってことで 休憩する。

このときに 太陽が二つ重なっていることが 判明。

街に行く。

ここで 職業を決める。

ハンターとフォースで どっちかにする。

ハンターだからって 魔法使えないわけじゃないけど ハンターだと クラスが上がりにくいってことになってます。

なら フォースのほうがいいじゃんって 思った方 いいセンスしてますねえ。

でもハンターにも一応技があります。SGとかSBも技です。ですが、蘭が使ったFSBは自分で作ったので技ではありません。ん。

そのあととばされる。

ここで精霊の泉につく。

精霊武器という武器を選ばしてくれらしい。

ここで俺がイメージしたのがメイだ。

ツインっていう武器になれて、青い二つの剣だ。

皆、忘れてるかもだけど、メイはツイン以外にもなれるんだよ？

そう、育成値を上げて、ウェポンアップしてやつ。

まだ、変わらないけどね。

そして、ここでナシンゴの登場

なしと林檎を合体させたやつっぽい。

多分まだ、バックに入ってるかな。

クレカに行く前に、精霊武器の説明もしてるから、おもしろいかも。

このあとクレカにつく。

ここで、初クエストをする。

シラノの群れ。

シラノは灰色の狼。

ここで、ソニックブーム＝SB

ソニックガン＝SG

が出る。

ここで、コンボ技が、でたけどまあいいや。

で、ここで、決めポーズのおさらい。

まず、おでこらへんの高さで耳のよこ、かめこみあたりから、人差

し指をこめかみのほうにさして、20センチ離す。

うん。だけ。

ここで

6話で召喚されたのが なぜなのか わかりそうで わかんない。
うん。

アイスバードとか サブリルさんとか。

どうだっていいがな。

ここで シラノ討伐3位にはいった。

あと 俺の 趣味が チョコだっていうのも ここでわかる。

そして この冒険でかなり使う ダムバックも もらう。

7話でサーナスにつく。

治安が悪く 小さい。

んで ランクE昇格試験を受ける。

うん 余裕だった。

毒なんて 知らない。

次に チロンとの出会いがある。

本名 チロン・シルバー かなりの 努力家

今 なにやってんだろうな。

一緒にミニアカリユウを倒す。うん。

サンダー つよかったなあ・・・

んで 街移動。

配達 クエのついでに。

その途中白黒のコンビに会う。

あんな コンビになりたいなあ。

んで グルーロにつく。

本の街で かなり大きい。

ここで ルウと会う。

外見は 栗色の髪に碧く澄んだ目。結構もてそう。

なんか よく考えると 最悪の出会いだな。

チンピラから 助けるなんて。

んで 調合を教えてもらうが……

ファイア練習しなきゃ……

はい。ルウにつれられ ボスラッシュをやります。

ここでFSBを使う。

武器に直接 普通は魔法はおくれないらしい。

いいね 反則キャラ。

ここで 初レア スランフィルを出す。

以上1 11でした。

また 区切りついたら おまけをつけま。よろしくう。

14 呼び出しと新たな冒険

14 呼び出しと新たな冒険

王：一つ そなたの力を見せてもらいたい
・・・は？

こうなる前の 二時間前

あの よくわかんない犯人を倒した後。

関係者の人に引き渡して、色々な人にお礼を言われたり。

ああ そえばトーナメントは 少し原因を調べたりするってことで
少し経ったらまた 開催するそうで。

んで なんかすごい正装な男の人が こっちに来た。

蘭：なんか きたぞ？

ルウ：俺等じゃないだろ

自分等の前で止まった。

男：私 マイラ国のマイラ・ウィリス・シルバー王の執事をやって
いる者です。

なーんか 長い名前いつてんなあ・・・

蘭：は：はあ

執事：そこで 王がお二人に会いたいと

蘭：・・・はい？

ルウ：ん？

執事：会いたいと

蘭：・・・あれ？王って偉い人だよな？

ルウ：何いってんだ お前

蘭：少々 おめちゃください

かんだ・・・おもいつきし・・・
少し 離れて話をする。

蘭：・・・なんで？

ルウ：今回の件じゃね？

蘭：いや なんで王？

ルウ：知らん 暇なんだよ

蘭：王・・・仕事しろよ・・・

なんつーことだ ってか情報早いな。

まだ 1時間もたつてない・・・

執事：終わりましたか？

蘭：いや・・・いえ はい

ルウ：終わりました

執事：では まいりましょう

外に出て 高級な乗り物が・・・ない。

そんな事を思っていると いきなりワープする感覚になった。
そういえばワープする魔法あるんだっけ。

しかも 口で唱えてないし この人かなりの実力者じゃん。

蘭：うわ・・・

ルウ：すげえ

目の前に広がる 大きな庭

門の大きさ 自分の約20倍

しかも メインに城 ぜってえ中にはいったら 迷う。

ルウも口をあంగりあけとる。

執事：どうぞ こちらへ

執事が門を開けると 玄関でさえ 人が100人はいれるぐらいの

広さ。

蘭：こんな所きていいのか？ てか服とか…普通の…

もろ 普通の格好（日本だと普通じゃないが）で来てしまった。

執事：服がどうか なさいました？

ん？ええと…

ルウ：すみません ちょっと

また 離れる。

ルウ：お前の国じゃ どうなのか知らんが 王に会うときは もし
くは上のもの者とかに会うときは 普通の格好 普段着でこなくち
やいけないんだよ

蘭：は？なんで？

ルウ：その人の普段がわかるからだ その時だけ正装な格好はだめだ
蘭：ふーん 執事の人は？

もろ正装な格好

ルウ：いつも上の者と一緒だと 正装だ ってか あの人の普段着
があれっばい

蘭：なーる

執事：おわりましたか？では 王の間へ

なんで この人はタイミングいいんだろう…
まさか…地獄耳か。

見るからに王の間って気がするところについた。

執事：では

口が 乾燥しまくりながら 入っていくと そこには 優しそうな

王がいた。

悪く言えば 何もしてなそう。

王：そなたたちが

少し見た目よりも 低い声だった。

ルウ：はい

なんか 城にはいつてから こいつも口数へってんなあ。

緊張か？

王：よく 来てくれた。早速褒美をやらうと思ったのだが

思ったのだが？

王：最近退屈での 一つ そなたの力を見せてもらいたい

はい。こういう事です。

退屈なら 本読め 国語辞典暗唱しやがれ てか仕事しろ。

小声で

蘭：これ 断るとダメ？

ルウ：牢獄いくかもな

蘭：まじかあ

適当な理由・・・

蘭：私たち トーナメント一回戦をやって 万全な状態ではないんで 王様に失礼かと…

こいつは 一回戦ででないけどな

王：フム となるとそなた達も困るだろう ローラライズ あれを

持ってきなさい。

執事：かしこまりました。

この人ローライズっていうんだ。
ってか 何もしないで 褒美くれるのかなあ？
執事：お持ちしました

カード1枚もらった。

王：では 見せてもらおうか

・・・へ？

カードを見ると

フルオールポジション。

うん そういう事が。やぶっておく。

ルウは ホルダーにこっさりいれて 適当なカードやぶって 使いましたアピールしてる。
せっけー。

執事：では 中庭に

・・・まじか

ハイ つきました。

うん・・・で？ 何も無いじゃん。

執事：では

内ポケットから・・・角笛とりだし ふきはじめた

何で1.5mぐらいの角笛があんな ちっちゃい 内ポケットに・・・

・・・

そういえば ダムがあるんだっけ。

ってか 俺の考えだと 角笛「竜なんだけど・・・つか モン。ンだけだな。

「かきーん！」

蘭：わっ！

なんか 出た！変モンでた！

竜じゃない 千本の剣

メイ：サウザンドソードですね

蘭：あれ 千本もあるか？

ルウ：ないな

うん 刃先こっち向いた。

ルウ：あれ 特殊でさ 何かにささつたり 落ちたりすると 消えるから 攻撃せんでいい

蘭：ん？じゃあ 避けるだけでよい？

ルウ：そそ

んじゃあ 簡単だ。

剣が一斉にこっちに来た。

蘭：スランフィル！

自分のまわりに 風を作る。

剣は 自分の所で 風にはじかれ 落ちていく。

ルウは 短槍で ふり回しつつ全て落としていってる。

あれに サイクロンしまえばいいのに。

全部終わった。多分300本ぐらいしかなかったような気が・・・

王：見事だ。スランフィルとは驚いた。そちらの者も 魔法を使わんとはな

蘭：ありがとうございます

ルウ：横に同じく

こいつ・・・

王：よいよい 一度話したいから さっきの所へ

ん？話？

王：そなた達の 力をみこんで 頼みごとをしたいのだ

・・・

いやぁ・・・

知るか その執事さんのほうが ぜってえ強いじゃん。

蘭：頼みごとは？

王：いま 魔界が開きはじめてるのは しっておるか？

ああ 本当なんだ。

ルウ：少々なら

王：よい そのことで その魔界は見えないのじゃ

ん？見えないのに どうやって 開きはじめてるってわかんだよ・

・

蘭：つというと？

王：魔界を結ぶ結界があるのだ。その結界にいる モンスターを倒してもらいたい。そうすれば 魔界は閉じるのだ。

いやぁ・・・絶対強いやつしかないじゃん。

もっと ほかのやつ 探せよ。

ルウ：その結界は いくつぐらいあるのですか？

王：まだ よくわからないが 30はあるな

いいいやぁああ。

まてまてまて 俺なんで ここにきたんだよう・・・

王：ギルドには 極秘クエストとして 実力者に やってもらっている。そなた達も頼む。

ああほかにもいるのか。 ならいいかな。

王：では 褒美は 終わったときだ。 よろしくたのむぞ

ああ そういうやり方は せこいな・・・

ワープで グループにもどされた。

蘭：強制かよう

ルウ：まあ おもしろそうだけだな

こっぴつやつに やってもらいなよう。

15 結界

15 結界

昨日の事を詳しく 聞くためにギルドにいつてみる。

ギルマネに色々と事情を話すと・・・

ギルマネ：ああ 少し話をするから 奥の部屋に

ああ そういえば 極秘クエストだっけ。

ギルマネ：マイラ国王からの人ね あの人は 結構人の目利きがいいけど ランクEの人にやらせるとなると こちらも面倒なのよねえ
蘭：というと？

なんとラッキーなことになったのだろう。やらなくてすみそうじゃないか。

ギルマネ：極秘クエストはランクがCから なんだけど・・・まあ
国王が直々にだから ギルド本部に言えば 全然大丈夫なんだけどね

・・・全然いいのかよ

ギルマネ：それで 結界についてなんだけど 結界は魔界の門を開くための鍵みたいなもののな その結界が 開くと 魔界の門が少しずつ開くのよ それで その結界を閉じてほしいってことなの

ルウ：それで 閉じる方法はそこにいる モンスターを倒せと

ギルマネ：そういうこと 結界にいるモンスターは全て 魔界のモンスターだから かなり手強いはずよ 詳しい情報は まだないけれど

またこのパターンか・・・

蘭：行ってみないとわからないと？

ギルマネ：そう 話が早いわね それで早速なんだけど 近くの結界を閉じにいつてほしいの ミラ山のところに あるんだけど もおフォースの人が1人いつてるから 早めにね

あと ワープ装置は結界の闇のせいで使えないから 徒歩かなにかで
蘭：早速か

ルウ：だな

地図をもらってギルドを出る。

ルウ：一応 ポーション適当に渡しとくから ヤバそうだったら
使え

蘭：そんなの いんのかぁ？

ルウ：一応な ケルベロスとかだと 結構辛いし そのケルベロスの件も前の話だしな

蘭：うえ・・・

ケルベロスよりも 強いやつかぁ・・・
想像つかん てかしたくない。

先に行ってる人が 戦う前に行きたいから 早めの出発。
着くと もろ山から 変なオーラみたいのが 出てる。

もう 心霊スポット。

「キエエエエエ」

変な 泣き声が奥からした。

多分 モンスターだろう。

声からして やばい 逃げたい。

そっと 近づいてみると 黒くて 変な鳥がいた。 ていうか 形が鳥にみえねえ。

ルウ：おいおい なんだコイツ

蘭：知るか・・・

メイ：えっと バルクロウですね

蘭：あれ カラスじゃないだろう・・・

その隣にローブかぶってる男がいた。多分先にいったやつ。
蘭：・・・ん？

あの 黒い髪・・・

少し ロープから出ている髪が黒かった。

ルウ：どした？

目も黒い・・・

蘭：・・・純？

俺の一言に そのローブの男は こちらを振り向いた。

純：蘭・・・か？

いきなりの再開で 何も言えない。

ヤバイ泣きそう・・・

ルウ：純って あのお前の友達？

蘭：ああ あの・・・

純：ちよつと 詳しい話は 後にして こいつ殺っちまおうぜ 詠
唱時間 なさすぎて よけてるだけなんだが

蘭：割り込むなって 言いたいとこだが やるか

・・・いまさら 思ったけど 奈々がいないじゃん。

まあ 後で聞か。

ルウ：動きとめるぜ？ハリケーン！

こいつ詠唱時間とか 関係なく かなり高レベルな魔法ぽんぽん出
すな。

動きを止めたように みえたが 風の中から はばたいて 出てき
た。

ルウ：げ あいつ風抵抗あんのか・・・

蘭：風抵抗？

純：ああ・・・ハンターだと 聞かないのか。モンスターには特有の魔法抵抗があつて 風抵抗があると 風がくらわないんよ いや少しはくらうから くらいにくいだな。あとその抵抗があるかわりに 抵抗に相性のいい属性もあつて 火↑水↑雷↑土↑風↑氷↑火つて感じた。あと光と闇は 光 闇だ。

蘭：そんなのあるのかあ

まだ わかんないこと あるのかよ・・・

そんな 話をしていると このカラスが羽をとばしてきた。

蘭：スランフィル

避けられなかった時ように 一応使っておく。

よけつつ ツインで落とす。

蘭：おもっ・・・

その羽一本一本の威力がはんばない。

ルウ：まかせろ！

なんか こいつ今日はりきつてんなあ。

ルウの槍が 光となり 狼となる。

ルウ：ウィルド バインドボイス！

いってなかったけど ルウの精霊の名前 ウィルドっていうらしい。
ウィルド：ウワオオ！！

地面が揺れる程の遠吠え 耳がキーンとなる。 ってか 痛い。

遠吠えで 少し怯んだ所に 武器に変わってたたみかける。

あれ？槍じゃない。太刀だ。

ああ そういえば ウェポンアップがあつたな。

翼を切りかかったが 真っ二つに切れなかった。
ルウ： き 切れネエ

そのまま けつて戻ってくる。

ルウ：あれ 硬すぎんぜ？

蘭：なめんなよ？

純：おうけい

こいつの魔法まだ 見てないなあ。

まず ツインで S Bを二発。

蘭：うえ・・・

上にはばたき 避けられた。

ちよつと 遠かったな。

純：アイス！

氷系魔法で翼を凍らせる。

アイスは初級魔法だが さっきの弱点でいくと あいつは氷だから
くらうのか。

純：スノウ！

全体を凍らせ 落とす。

蘭：おお

純：感心しないで ちゃっちゃんとやれよ。

蘭：あ おけ

さっきのS Bより マナを込め ついでに

蘭：スパーク S S B！

電気をまとっている 真空刃を放つ。

魔法もつと 協力なの 覚えたいなあ。

少しとけた 氷が 電気をよく通し しかも傷を負っていたので
血も電気をよく通した。

そのかいもあり 翼が真つ二つに切れた。

蘭：おお・・・ よし 袋叩きだ。

そう集団リンチ。

飛べないカラスは もがいたりしたが三人からの攻撃は もろ受け
た。

うん。無駄な抵抗。

変なオーラが なくなった。

多分 結界が閉じたのだろう。

蘭：ギルドに戻って 報告してから 話そうぜ。

純：おけ

帰り道もあり 話さなかった。色々と話すことを この時に考え
といた。

ギルマネ：終わったのね ありがとう まだ 結界はあるから ま
た現れたらがんばってちょうだい

蘭：うす

報酬を受け取って、近くのカフェみたいなところに行く。

純：さつきから ずっと思ってたんだが この人は？

蘭：ああ いてないな

ルウ：ああ 師匠的存在。

蘭：・・・いつからだ？

ルウ：会ったときからだ 俺はクリスタル・ルウ ルウって呼んで
くれ。 本職はハンターだが まあ色々とあつて魔法を使ってるな。

蘭：お前 ハンターなの！？

ずっとフォースだと思ってた。

つてか ハンターであの魔法の威力つてどんだけだよ。

純：へえ・・・俺は加藤 純 まあ蘭からきいてるだろうけど
異世界からきてる。フォースで氷系魔法使いだ。

蘭：お前 精霊武器どれ？ みてないんだが

純：ん？このローブだよ 精霊は小型の竜にした

ローブ・・・精霊 武器つて 武器じゃないやつもあるのか。

蘭：あと 一番気になってんだが 奈々は？

純：あれ？お前と一緒だと思ったんだが違うのか ってことは 別
々にワープするんだな

蘭：そういえば そんなこと言ってたな。

あの天然っぷりだと カードとかもわかってないんじゃないのかな
あ・・・

紅茶みたいな 飲み物をのみつつ カードを開けてみる。

蘭：うわ ファイアボールとなんか すげえひかってんのあるんだ
けど

ルウ：おお クリレアじゃん レアの次のレアで ハリケーンとか
な。

純：ほお 俺も初めてみた あ 俺の中ないや

カードを見ると あ ライトニングだ。

土とかのやつ みてみたいなあ。

蘭：やつぱり 極秘とかだと 報酬も上がるんだな

ルウ：だろうな。

そのまま 色々と話して 宿に行くことにした。

うん 疲れて ねむすぎる。

純と同じ部屋だった もう少し語る。

純：おれ 帰れんのかな

蘭：帰る 親も心配してるだろう

純：だよなあ

蘭：これから どうすんの？

純：いままで 通り別行動だろう この世界広すぎるから 危険だ
けど効率悪いもんな

蘭：そか

純：奈々とかも どこにいらるうな

蘭：まあ 一応生きてるだろ ダメだ 眠い 今日は寝る

純：うい

今日は本当に疲れたので すぐ 夢の中に入っていった。

15 結界（後書き）

会うの少しはやかったなあ
ちと後悔w

16 組手

16 組手

朝起きると、横には起きて変な本を読んでいる　少し美形の純がいる。

ああ　なんで　俺の周りはモテそうなやつばかりなんだろう。
大きなあくびをして、やつくりと体を起こすと、こちらに気付いた
ように。

純：お　起きたな　飯いかね？

蘭：ん？ああ・・・まだ　眠い

純：そか

昨日の疲れが出たようで、全く動く気になれない。

寝なかったが、目を閉じて休んでいたところ。

持っている本に変なしおりみたいのをいれながら閉じ　純が

純：んじゃ　まだ出るのも早いし　ルウさんと組手してくる

ん？組手？

蘭：あいつが　そんなのやるか？

ぱつと目を開けて答えた。

純：ん？だつて　あの人なにか外でやってるぜ？

蘭：なにかって？

純：素振りみたいの

素振り？　そんなのこんな朝にやるなんて・・・

蘭：老人か！

ルウ：素振りのやり方が　ちがうけどな

やり方ねえ・・・

蘭：俺も行く　もお目が覚めた。

ルウ：ういいうい

宿の外にでると　少し大きめの庭がある。

そこには槍を着いたり　回したりしている　ルウがいた。

汗だくの顔をぬぐいながら　こちらに気付いたのか　槍を止めた。

ルウ：へえ　珍しいなお前が起きるなんて

蘭：まあな　こいつに起こされた

純：起こしてねえ・・・　でルウさん

ルウ：呼び捨てがいいなあ・・・さんづけ　嫌い

こちらの世界にも　さん付けはあるが　こいつが嫌いなだけ。

純：んじゃルウ　組手しません？

ルウ：組手かあ・・・最近やってなかったし　やるか？

純：どもっ

なんか　始まったなあ・・・　おもしろそうだけど。

街の外に出て、少し広い場所で行る。

てか　組手って　空手とかでしか　やらないと思ったから素手だとも思ってたのに。

ルウやり持つてるし。いや刃は布みたいので　まいてるけど。

純：んじゃ　いきますよう

ルウ：ん　おけ

ルウが言った瞬間に　ルウは槍を投げた。

純はいきなりの攻撃で少し反応は遅れたが　ぎりぎりではよける。

だが　投げてせまってきたルウが　回し蹴りをしかける。

純はその　蹴ってくる足じゃないほうに

純：アイス！

片足を地面に凍らせる。その間に純後ろに下がる。

ルウは 片足が凍り 体勢が悪くなったが そのけりそこねた足で やりを蹴り上空にあげる。

そのとんだ槍の持ち手の部分をボレーし 純の方向に飛ばす。

思わぬ攻撃に避けきれず もろくらった。

ルウ：終わりかな

純：あれはない・・・足で飛ばすなんて・・・

ルウ：ああ・・・てか

凍ってる足を上げて 氷から取り出す。

ルウ：マナの練りが足りないぜ？

純：げ・・・

純でも 歯がたたないのかあ・・・

蘭：よし おれやる

ツインの鞘を入れたままにして軽い 運動。

ルウ：お？珍しいな やる気になるなんて

蘭：うるさいっ

ルウ：まあ いいが 刃は出そうぜ そっちのがやる気であるだろ？

少し怖いが・・・

蘭：おけ 世話になった分 アダで返す！

純：最悪なやつだな・・・

ルウ：クク 返せるか？ 来いよ

蘭：言われなくてもだ！

ダッシュで 切りかかる。

ルウは太刀にもちかえ そのまま受けながされる。
低い体勢になり 足を蹴る。

ルウ：つつ

こんな細い足 簡単におれそうなんだが 硬すぎる……
つか 蹴った俺のほうが痛いかもしれん。
低い体勢になつてゐる俺に上から太刀を刺す。
前転みたいのをし 避けたが……
あれ刺さったら ぜつてえ死んでる。

蘭：あ あぶねえ……

ルウ：まだ 返しきれてないぜえ？

コイツハ ホントウニ コロサレタイノカ。

蘭：スパーク

SG連射 すげえはやさで。

くらつたら 蜂の巣は決定。

ルウ：うおつ 挑発にのるなよ！？短気だな

とか いいつつ槍に変え はじいている。

蘭：お前にいわれたくねえ！！

叫んだ 腹のそこから。そのまま フィルを使い 間合いをつめて
一気にたたみかける。

それに 対して 槍の矛と もとでかわすルウ
刃と刃がぶつかり 力勝負になる。

こんな 細い腕に……って 二度目か。

それをはじき SBを放つ。

決まった。この距離ならよけら……

SBの軌道が 風で変わった……

口で言わなくても サイクロンならいけんのか……

ルウ：ぶねえ……

蘭：くつそう……

も少しだったなあ・・・

蘭：降参 マナきつつい

SGうちすぎた・・・

ルウ：んだよ つまんないな まあ 魔法使わせたしいいか

こいつ やっぱあとで ぶつとばす。

純：おもしろいものも みたし 俺は もういくぜ？

蘭：ん？もういくのか？

純：ああ ついでにしくもしてきたし

蘭：そか 奈々に あつたらよろしく

純：おけ んじゃっ

ルウ：ちゃんと 練る練習しろよ？

片手を上げて去っていった。

ルウ：あいつも マナの量はんばないな・・・

蘭：そうか？

ルウ：ランク いくつなのか知らんが かなりだ

蘭：そういえば おれも聞いてないや まあ あいつのことだし

結構上がったそうだな

ルウ：だろうな・・・ はあ・・・俺もそっちの日本っていう世界に
生まれたかった

蘭：ククっ いまさらだな

まあ 日本だと魔法はないがな

ルウ：さてと・・・飯いくか？

蘭：ああ・・・行く 今何グリ？

グリというのは ここの時間の単位

1グリ＝4時間　24時間は6グリだ。

日の進み方は多分一緒。

ルウ：3グリちよつと前

蘭：昼かよ！？よし行く　早く行く

昼飯は　パンフレットにのっていた　オススメの店　みたいのに行く。

なんか　高級そうな　食べ物だったが　価格は　そんなには　高くない。

蘭：ん　美味しい

ルウ：だよな　俺も前　来たんだが　結構美味しい

うん　食べ物の名前　マグルのマニマニ

うん　さつぱり。　てか「ま」が多いな。

蘭：さてと・・・クエストでもいくか？

ルウ：いや　そろそろ他の街に行こうと　思ってるんだが

蘭：おお　いいね

久しぶりの街移動だ。

17 恋愛って すこいね（前編）

17 恋愛って すこいね（前編）

久しぶりの 街移動。

ってことで 宿に戻り 整理していたところ・・・

バッグの中から昔の服がでてきて・・・

内ポケットに音楽プレイヤーはいつてたの忘れてたんだよ。

久しぶりに音楽聞ける！って思ったんだが・・・

充電切れてる・・・電源 入らない・・・

落ち込んでいて ふと思い出す。

もう一個ポケットに充電器入ってた！

ファミレスの椅子のところにコンセント差込口があったから つい

でにと思って 持ってたんだ！

・・・

差込口こつちの世界に無いじゃん・・・

いや 電気みたいなのは あるんだが この豚の鼻みたいなやつはない。

また落ち込んだ。

だが 俺の今日の頭は冴えていた！

USBのところにスパーク流し込んだら できるんじゃないか！？

スパークを唱え やってみる。

蘭：電源はいったああああ！

久しぶりの歌だ！

自分はマイナーな歌は あまり聞かないから あまり友達と歌の話はしないが かなり好きだ。

「トントン」

ルウ：行くか？

蘭：おー 今行く

自分は 周りの声がギリギリ聞こえるぐらいの音量で大体聴いている。

宿を出ると 歩いてる人にヘッドフォンをちらちら見られた。

耳隠せるし 一石二鳥だと思ったんだが 逆に目立つ。

ルウ：なにそれ？

蘭：やっぱり こっちの世界にはないのか これは音楽聴ける機械
この耳に当てるやつから 音楽が流れんの

俺の簡単なわかりやすい説明でも ？？みたいな 顔されたから
ヘッドフォンを耳に当てさせる。

ルウ：うおっ！？なんだこれ こんなかに人でもはいつてんの！？

蘭：入ってるわけ無いだろ

まあ 最初はそう思うよね。

んで 今流れてるのは 少しマイナーな アクアタイ。ズの虹。

ルウ：これ 2個ないの？

蘭：ないない この機械から 流しているから

ポケットからとりだし 見せる。

ルウ：むう・・・ まあ いいか

蘭：残念だったな

そこで 次の街は・・・

ルウ：少し 北の方にいつてみるか お前の来た理由がわかるしねえ

蘭：おっ いいね

ルウ：流石にその 召喚師のいるところまでは 遠いが ゆっくり
行ってみようぜ

蘭：おけ

街を出て 歩いていると・・・
手を振ってくる女子がいた。

蘭：あれ だれ？

ルウ：ん？ ああ・・・幼馴染っつか・・・

すげー 可愛い・・・ 少し長めの髪に 黒いのパーカーみたいな
やつ。

???：久しぶりい あれから どうだったあ？

ルウ：んー・・・こいつにふりまわされっぱなし

蘭：おいっ

???：へー こんにちはっ えーと私の名前は クリム タネト・

クリム

蘭：・・・誰？

クリム：えーと こいつの元彼女

ルウ：おいっ

蘭：へーっ

ニヤニヤしながらルウを見る。

まあ こいつなら いくらでも彼女できそう。

蘭：俺は スター・・・

ルウ：ああ こいつなら 別に本名でもいいと思うぜ？

蘭：ん？なら 俺は 浅井蘭 蘭って言ってくれ

クリム：ん？ アサイ？ 珍しい名前ね

蘭：まあ わけアリで

クリム：まあ いいんだけどね んで ルウ 最新情報聞く？

ルウ：んー聞くよ ちと蘭 離れとけ

なんか 自分どかさされてる。

蘭：なにが　なんだか　さっぱりなんだが
クリム：私は　情報屋なの　だから2人に話すと　2人分のリルと
るからね　ルウが聞いて　君に話すのなら　別にいいしね

情報屋ねえ．．

蘭：おけっ　そこらへんで　なんかしてるよ

15分後

クリム：それじゃ　またね　蘭君も聞きたくなったら　私に聞いて
ね？

蘭：あーい

クリムは　去っていった。

ルウ：さてと　行くか　行きながら話すよ

蘭：ほいほい

さっさと　足を進めて　話を聞く

ルウ：ここ最近　魔法カードの種類が　増えてきたらしく　一段階
アップしたやつが　ギルドから出されたってさ

蘭：最高がどこまでなのか　知らん

ルウ：ああ　クリレアが　最高なんだが

蘭：そなの！？

ルウ：あとは　東の．．．

蘭：それよりさあ　あのクリムさんと　なんで別れたのかとか　知
りたいんだが
ルウ：ぶっ

だって　聞きたかったんだもの。

ルウ：うーん．．．まあ　別にいいけどさ

蘭：おおーっ

「ルウサイド」

付き合ったのは1年くらい前。

俺は別に 恋とかあんまり 気にしなかったから どうだってよかったんだ。

だけど あいつと 話していると楽しかった。明るいし クエストとかもそのころから 行つてて ほかの仲間と一緒にいってたりもした。

そんなある日 珍しく2人で露店めぐりしている時に

クリム：私と付き合ってくれる？

いきなり言われた。 だけど 俺は すぐうれしかったんだ。

俺は 即OKした。

これからも 楽しくやれるなら俺はこっちがよかったんだ・・・

俺の他に こいつを好きなやつなんて いくらでもいた。

それほど クリムは 可愛くて 性格も良かったんだ。

そんなやつらからも 応援してもらってた。

あいつも ほかの女子から「良かったね」など言ってもらってた。

だがある日 俺は思った。

あいつを 幸せにできるのは 自分なのか・・・と。

なぜなら ほかにこ こいつを好きなやつに もっと顔もよくて 性格もいいやつが いたはずだと。

俺は 思い切った。

ルウ：もう・・・やめにしない？

このとき 俺はよく覚えている。

このときに いきなり雨が降り始めたのも 嫌な思い出た。

あいつは 降っているにもかかわらず しゃがみこんだ。

クリム：ひぐつ ふう・・・

クリームは 泣き始めた。

このとき 俺は本当に後悔した。

本当に こいつは 俺のことを愛してくれていたんだと。

クリーム：あぐっ・・・ な なんてなの？・・・

顔を見せずに ポツリと言った。

俺は 無言でどこかに 去りたかった。

ルウ：いや・・・その・・・

クリーム：うう・・・理由もないんだ？・・・

この 鼻声が すごく俺の胸に突き刺さった。

ルウ：俺は・・・

クリーム：いいよ・・・もお・・・ うぐっ・・・ 今まで ありがとう

こいつは 泣きじゃくった顔を隠しながら 立って行こうとした。

ルウ：まてって！俺はお前のこと 好きだよ 大好きだよ？

クリーム：・・・なら なんてなの？

立ち止まり 泣きじゃくった顔で 見つめられた。

長い髪をつたって 落ちる雫。

可愛すぎる いきなり子供みたいにみえた。

ルウ：俺じゃ駄目なんだよ

クリーム：なんで？・・・なんで？

ルウ：なんでって・・・

クリーム：いやだよ・・・ 捨てないでよう・・・好きなのに 大

好きなのに なんで・・・

ルウ：俺はお前と 友達・・・いや 親友でいたい 好きだけど・・・

こんなに ぬれたクリームを見るのは もうつらかった。

クリム：認めたくない・・・勝手だよ・・・勝手すぎるよ・・・
ルウ：うん・・・ごめんね 本当に・・・

俺はそつと うしろから抱きしめた。

クリム：・・・ひぐ・・・うわああああああん！！！！

俺は 雨に打たれながら 泣き叫ぶ こいつのそばに いてあげた。
俺も 泣いてしまった。

ルウ：んな 感じ

蘭：ああー・・・なんか複雑だ

こついうの 複雑な恋愛感情っていうの？

ルウ：だろう？

蘭：ごめん なんかノリでいきちゃって

ルウ：いや いいけどな

蘭：それで お前はまだ クリムさんのこと すきななの？

ルウ：どうでしょう？

蘭：チッ

後で クリムさんにも きいてみるかなあ・・・

ルウ：んじゃ 次はお前の番な？

蘭：は？

ルウ：は？って お前の初恋でも なんでも

蘭：うあー・・・まじで？

ルウ：決まってるんだろ？

おもしろそうだけど 後編に続く。

18 恋愛ってすごいね（後編）

18 恋愛って　すごいね（後編）

ルウ：いいだろ？俺だって　話したし

蘭：んー・・・

まあ　これで　話さないとせこいよなあ・・・

つつか　なんか魔法がきそう・・・

蘭：はいはい　わかりましたよ

ルウ：おお

過去

俺は　深夏っていう子に恋をしていた。

ショートヘアーで　少し可愛く　明るくて話しやすい子だった。

可愛すぎず　お高い感じでは　なかったので　ライバルはたくさんいた。

ある日　俺はその子と　席が隣になる。

こんときは　うれしいのか　苦しいのかわかんなかった。

好きな人が　近くにいると　学校・・・いや世界が変わった気がする。

そして　友達とかに応援され　俺は勇気を出し手紙を授業中に渡した。

「好きです　付き合ってください」

ちいさい紙に　ちいさく書いた。シンプルな告白の文字を。

怖くて　俺はノートにうつぶせになった。

すぐに　深夏は俺の肩を叩き　机のすみに　俺が渡した手紙を置いた。

ああ・・・返された。

俺は 終わつたと 思い その手紙をちぎろうと手に取ると……裏に 返事が書いてあった。

「放課後一緒に帰ろっ」

この 返事に俺は どうすれば いいのかさっぱりだった。うれしがっていいのか 泣いたほうがいいのか 悲しがったほうがいいのか。

自分は放課後までは ずっとソワソワしてた。

放課後 皆は すぐにかえっていった 2人だけが 教室にのこった。

深夏：んじゃっ いこっか？

蘭：え？ああ うん

2人で 普通の下校のところは通らずに 遠回りして帰った。いつ 返事されるのかと ずっと待っていた。

深夏：あのね

ついにきた。

深夏：私 前から 浅井君のこと 好きだったんだ

蘭：え？ほえ？

これは okなのか？

深夏：私からも お願いします！

蘭：え……え……ええええ！？？

な なんて 俺は こんな路上で 大きな叫び声を上げたんだろう。理由は他ない。

うれしかったからだ。

蘭：ほ ほんとに？

深夏：うん

赤く染めた顔が 凄く可愛かった。
これから 俺は 楽しい恋愛をした。

一緒に公園でふらふらしたり 買い物にいたり ごく普通の恋愛を送っていた。

ある日 ハイキングに出かけた。

普通に 野原を歩いていった。

深夏：つつ いったっ

足をひねったらしい。

蘭：うわ きれいに赤くなってる

深夏：うるさいなあ

ほっぺをふくらませ わざとらしく 怒る姿。

ああ ダメだ 可愛すぎる。

蘭：あはは あっ でも今日薬もってきてないんだよね 湿布とかも

深夏：準備わるう

蘭：わるう ござんしたねえ

深夏：んじゃ おぶって

蘭：・・・へ？

いきなりの言動にとまどっていた。

深夏：えいっ

片足でどうにかして 立って そのまま 俺の背中に跳んだ。

蘭：ええっ！？

なんつー わがままなやつなんだろう。

まあ いいか 頼られて 好感度も上がるはずっ

だが 俺は まだ小学生だから こういう時は 喜べなかった。

蘭：少し 背中から 離れて 乗ってくんない？

深夏：無理 手の力 そんなにない

蘭：えっと あの そのう・・・

深夏：いいじゃん 別にいい

蘭：知らないよ？

深夏：蘭だけ だからね？

この言葉は 本当にうれしかった。

特別な存在。これは 心に残った。

だが その次の日 ありえないことが起きた。

その日は 隣が珍しく空いていた。

あいつが 風邪なんて ほぼないのに。

先生が 入ってきた。そして すぐに

先生：深夏さんは 転校になりました。

・・・え？

なんにも 昨日は いってなかった。

いきなりの 衝撃事実。

俺は 家に帰って 泣いた。

本当は 頼られては いなかったんだと。

大切なことを なに一つ言ってなかったこと。

心に秘めていたことを 一つもいってくれなかったこと。

自分が 馬鹿に思えてきた。

夜に散歩して 深夏の家に行く。

まだ 家にはいるらしい 灯りはついていて。だが深夏の部屋に

は灯りはついてない。もう 片付けをし終わったのだろう。

インターホンを押す勇気はなかった。

それから もう 家にはいかなかった。

もう・・・なに一つ わかっていなかった自分をなぐってやりたか

った。

蘭：つう 話よ

ルウ：なんか お前もシビアだな

こいつに同情されるとは……

ルウ：それで それから 一切あつてないんだ？

蘭：ああ 全然な

あれから半年かぁ……

今 どうしてんのかなぁ……

そんな話をずっと して話していると

ルウ：あれか？

蘭：おっ 街だな。

大きな 塔みたいのがある。

時の街 グリーラス

蘭：結構 遠かったんだな

ルウ：あれ？ いったてなかったか？

蘭：いったてねえ……

「ゴゴゴゴゴ！」

地面が ゆれた。

蘭：……地震じゃないよなぁ……

ルウ：なんつーか 塔の横に でかいのが いるような気がする

俺 あれ知ってるよ……

蘭：ゴーレムつうやつでしょ？

ルウ：遠くて わからないが 多分そう

いってみるしかない。 あの塔無くなったら やばいっばいし
ルウ：ああ・・・ゴーレムだ

レンガの大きいやつが かさなつて できたみたいなやつ。
蘭：強い？

ルウ：つつか あれ結界の番人みたいなやつだろ？

蘭：街に結界できんの！？

ルウ：知らん まあ 大丈夫

蘭：ん？1人でいけんの？

ルウ：なめんなよ？

珍しく詠唱時間を少しかけた。

マナをねってから・・・

ルウ：ハリケーン！

塔をくずさないように 一点に集中したハリケーンをはなった。
カンペキに体に風穴があいた。

蘭：おお

ルウ：あいつは 土だからなっ

そういうことか。

そこら中から 拍手がとびかった。

ルウ：気分もいいし もお 遅いから宿いくか？

蘭：おけおけ

久しぶりの知らない天井があつた。

ルウとの組手と歩いた疲れが どっと出て すぐベッドにもぐりこ
んだ。

だが・・・

「こんにちは」

ドアをノックする音が聞こえる。ルウだろう。

蘭：どしたあ？

返事がかえってこない。

めんどくさいが きこえなかったのだと思いベッドから出て ドアを開ける。

蘭：はいれって・・・

見知らぬ 人がいた。

蘭：あれ？

?????.....

18 恋愛ってすごいね（後編）（後書き）

ごめんなさい

恋愛は苦手です

書く本人がそういう体験しないんでw

19 さんざんな一日

19 さんざんな一日

蘭：あれ？

????????

ハンチング帽のつばをうしろにして かぶっている女の子がいた。
青みかった色の髪で ショートヘア！。

多分 同年齢ぐらい。

どこかで 見たような思い出があるが……
記憶喪失？

????：やつぱ 蘭だあ！

この声 なんか 懐かしく思い出させる声。
心に響いてくる。

蘭：え？うえ？ まさか??

ありえない……

ここは ヴェラルルなんだ。
うん夢だろ。

????：私だよ？

蘭：うそ……だあ…… み 深夏？

もろもろ外見そっくり 声も。

やつぱり 今日の恋話のせいだな……

夢にまで でてきやがった 泣かせないでくれ。

深夏：そだよあ？久しぶりっ

蘭：……夢じゃ ない？

深夏：ひっぱたいてあげようか？

いきなりこいつ ひでえ……

まあ 一応確認として……

蘭：ああ よろしく

「ぱっしーん」

ベットからばさつと起きる。

蘭：まじで 夢オチかよ……

こういう場合は 夢じゃない！って なるはずだろう……
まあ ここヴェラルルだし ありえないんだけどな……
音楽聴きながら もっかい寝よう……

はい。朝です。

なんか あまり寝た気がしません。

メイ：どうかしました？

蘭：わおっ なんか 久しぶり

首かざりから でてきて ひょこっと ベットに座る。

かわいいやつなら メイが近くにいないじゃないかつ

せ 精霊だけど。

メイ：最近 話してくれなくて 寂しかったんですよお？

蘭：そなの？ ごめん

怒ってるのが わかりやすく 頬をふくらましてムスツとしている。
なんか 和む。

蘭：おこるなつて

メイ：おこってません！

蘭：それを 怒っているというんです

メイ：そうですか？

なんか 久しぶりに会話をしていると。

「こんにちは」

ルウ：ギルドが なんか作ったらしいから いかね？

蘭：なんか？ ってなにさ？

ルウ：特殊戦闘攻略システムってやつ

蘭：は？ なにそれ？

そんな漢字だらけのシステムって 気難しいやつでしょ？

ルウ：簡単にいうと アスレチック？ 地面からとげとか 落とし穴をよけるとか。

蘭：ほほお・・・ そういうのって おもしろいよなっ いくいく

着替えて ギルドにむかう。

ギルマネ：ああ やりますか？

蘭：お願いしますっ

ギルマネ：でわっ

ギルマネが カードをやぶると 一瞬で 目の前の風景が変わった。

蘭：わおっ ワープとは ちがうんね

一直線の道がある。廊下みたいな。

ルウ：よし いくかあっ

「グウウウウウウ」

蘭：ぶっつ お前 どれだけ腹減ってんだよ

ルウ：ちげえよ いまの音なんか 機械っぽい音・・・だっ・・・

うしろを振り向くと とげ付の壁がせまってくる。

蘭：いきなりかよ！？

ルウ：走るぞ！！

下からもとげ。華麗になるジャンプでよける。

蘭：うおっっ

よこから槍。つつか。どんだけ多いんだって。ぐらい。

ルウ：おいおい。これどんだけだよ……

蘭：結構楽しいぜ？

ルウ：まあな

廊下を走りきると。草原みたいなところに出た。

草原つつつか……

蘭：竜の巣？

ルウ：おおー

そこら中に。竜がたくさん……

こちらに。気付いたようで。一斉にファイアブレスがとんでくる。

ぼんぽんと。避けたが。途中に……

「ぶしゅー」

蘭：ん？ なん……

なんか地面から。煙みたいのが。でてきた。

いきなり。なんか眠気が……

睡眠ガスか？……

「ブワオオオオ！！」

動けなくなった俺に。ブレスがくる。

もろ。ブレスを受けると。ギルドに戻ってきた。

蘭：ああ。そういえば。システムだったっけ……

火傷も なにもしていない。

現実だったら 死んでるのか……

つうか 睡眠ガスって なんだよ……

ルウはまだ システムにはいつてるらしい。

なんつーか 魂だけがない人間みたいな感じになってる。

横の椅子で 座って待っている……

この街あまり ハンターとかフォースとか いないな……

ギルドもすかすか 前の街とは 全然ちがう。

そんな静かなところでギルドオススのコーヒーを飲んでいる。

砂糖みたいのは無く 最初から 甘めである。

ブラック好きな人は ちよっと甘すぎるかも。

まあ 俺は 甘とう だからいいんだが。

音楽を聴きながらも まっているよ ようやく来た。

ルウ：な なんだよこれ……

蘭：ドコマデ いったん？

ルウ：なんつーか 変な火山みたいところで そんなから 溶

岩の連射がきたとこ……

蘭：な なんだそれ……

こ 怖いな このシステム

ギルマネ：本部の情報によると いまのところ 8位のところまで

進んでいるわね

蘭：おおっ 流石

ルウ：なんか 微妙だな

蘭：そうか？ 俺 いくつだったんだろ……

「ゴーーーーン」

蘭：ん……？

ルウ：ん？ 鐘だな 街のシンボルの……

ばたっ・・・

ここで 俺の意識は とぶ・・・

ルウ：お おい！！！？？

あたまの中に鐘の音が響いていた・・・

20
ついに……

いきなり 倒れた蘭をじっとみる……

ルウ：なんだこれ……？

なんで こうなったのか わかっていないところに。
 ????.ここにちはあ

ギルドのドアが開いて女の人がつて・・・

クリームだつた。

クリーム：あれ？昨日ぶり　ってなんで　蘭君こんなところで寝てるの！？

驚いた様子でしゃがみこみ 顔をつんつんしたり 脈をはかったり
してる。

クリーム・生きてはいるわね　どしたの？

ルウ：なんかいきなり倒れた　さっき鐘の音になったけど　そうい
う効果でもあったけ？

クリーム：そんな効果・・・いや 最近時の鐘がなったあと 意識がない人っていうのは 聞いたわね 昔はそんなのなかったんだけど

とメモ帳みたいのを広げながら
いつている。

ルウ：もしかして　それか？

クリーム：かもね 確率の高いね．． このまま食事せずに 死んだ人もいるし．．．

ルウ：は？こいつ死ぬの？

昔からの親友って わけでもないのに 少し泣けてきた。

クリム：多分 鐘になにか 仕掛けたやつが いるかもね

ルウ：魔界の影響とか？ 昨日鐘の横に 結界あったし

クリム：まあ いった調べてみようか

ルウ：おう

蘭は ギルドに置かしてもらって 鐘を見に行く。

高い塔の先つちよに 円形の広場があって その中心に鐘がある。

それをしたから 見上げる。

なんつーか オーラみたいのをかもし出してる。

ルウ：これ のぼんのか……

クリム：はやくいくよう？

そっついながら 塔の入り口に入る。

その瞬間……

クリムは闇に消えていった。

ルウ：クリム！？

あせって あとを追いかけて 入ると……

闇が広がり ワープした。

クリム：ダンジョンワープかぁ……

ルウ：今は あまり使い手はいないって 聞いたのにな

ダンジョンワープは その名のとおり ダンジョンにワープさせられる。

ダンジョンとは迷路みたいに 入り組んでいる 通路を進んでいき

モンスターなどを倒して 経験を得るみたいなどころである。

初心者は こういうダンジョンなどで 倒し方などをみにつける。

たまに 古来のアイテムなどが できるときもあり 何度も行ける者が

多いという。

ワープ型は 足止めなどで よく使われるが 最近使い手は 減少しているらしい。

クリム：何レべっばい？

ダンジョンには レベルがあり そのレベルによって 難易度が決まる。

レベルは 中のモンスターや 迷路の難しさ トラップの多さなどで 決まる。

モンスターだと シラノはLV8付近 ブラックドラゴンはLV4 1付近だ。

LVは どこまであるのかは 知られてはないが 発見されたのだとLV80まで。

LV100以上も あるかもしれない。

ルウ：さっぱりだ。 迷路なんて やる気しないから 俺いかないんだよ。

クリム：頼りにならないなあ

ルウ：うるさい

そうこうしてる内に・・・

クリム：あれ？出口だ

ルウ：うわっ LV1ぐらいだったんじゃない？モンスターもいないし・・・使えても 使えてないな

つつか 宝の持ち腐れだ。

出口を出て 階段をかけのぼって 広場にでる。

ルウ：べつに なにもなさそうだけだな・・・

クリム：そのようね

????：なんだ お前等は?・・・

鐘の後ろから 黒いものを着て 変なやつが出てきた。

つーか 魔族。

クリム：・・・あなたこそ なにものよ？

????：フン・・・まあいい 私はグルガ・・・魔王様の家来だ

魔王？

ルウ：もお 出てきたのか・・・

クリム：らしいよ？

でしゃばって 出てきたってことか・・・

グルガ：この世界の住人を調べるため この鐘に呪いをかけ なら
していたのだ！

なんか 聞いてないのに 言い始めたぞ？

つーか ネタバレ？

ルウ：そんなこと 言っているのか？

グルガ：フン どうせ お前等は

ここで 死ぬとか いうんだろうな・・・

こいつは 自分が負けるフラグをつける気か？

グルガ：私に殺されるんだよぉ！！ドルーガ！

あ・・・フラグ成立？

つーか 荒いよ？うるさいし。

思ったより 速度があつたが よけられた。

グルガ：なに よけてんだ？くらえよ！そして あじわええ！！

なんか グレてんな。

グルガ：まずは そっちの小娘から殺してやろう・・・ドルマド
ン！

ああ・・・こいつは 力量も見極められないのか。
クリム：なめないでよね？

精霊が弓矢になる。

ショートボウ。

クリム：シャインアロー！

ドルマドンの闇を貫き グルガの腹を貫通した。

グルガ：グッ・・・なんだと？

クリム：あれ？手加減 結構したんだけど？

なんか 小悪魔っぽい 笑みをうかべてる。

グルガ：ここは 一旦引くか・・・

ルウ：おい！逃げるのかよ！？

グルガ：うるさい！この借りは 絶対 返すからな！！

闇をまとい 一瞬で消えていった。

重い空気が 消え 変なオーラも消えた。

ルウ：・・・強くなつたなあ

クリム：えへっ だてに自分で情報探してないからさあ
ルウ：だな

ま 怖いけど。

ギルドに戻ってみる。

蘭：つつ 頭痛がつ・・・

吐き気がするし 気持ち悪い。

ルウ：お 起きたか

クリム：本当だ

ギルドだと 邪魔だつてことで 近くの宿に おかしてもらった。

蘭：あれ？クリムさんがいる

クリム：やほお 後で・・つかアシタ話たいことがあるから 今日はねなよ？ 呪いも後々怖いしね

蘭：呪い？

聞いたが いきなりくらつときて 寝込んでしまった。

ルウ：・・・ 回復早いな

クリム：ねっ もっとかかるって ギルドの人もいつてたのに・・・

ルウ：ま 反則キャラだしな

横で 寝ている姿を見つつ クリムと語りつくした。

21 まったりと（前書き）

ごめんなさいっ 色々リアルがいそがしく アップできなかった
ですっ

21 まったりと

21 まったり

蘭：ついに できたの！？

頭をかかえつつ 昨日の話を聞いていた。

ルウ：ああ あの家来とかいうやつが 本当ならな
蘭：うわあああ・・・

これが 俺の役目なら！つか いうやつじゃないよ？ 俺は。
こちらの世界の朝飯では よくでると言われるバム（粉をこねて
焼いた もろパンと同じようなもの）を食べながら聞いている。
中に甘いアンが入ってて 結構美味い。

蘭：魔王かあ・・・

クリム：そうね まあそのために 君たちが呼ばれたんだからね
蘭：そうか どうかはって・・・あれ？

なーんでクリムさんが 知ってるんだ？

情報屋だと そんなのも知れるの？

ルウをにらみつけると 目をそらした。

ああ コイツか・・・

後で 蹴つとこう。

蘭：だって 俺が呼ばれた時はまだいなかったはずじゃ？

クリム：予測されてたかもね 魔王が出てくるのが・・・

蘭：うーん・・・あと なんで俺たちなのか・・・

クリム：それは 前回だって普通じゃないけど 普通な人

よ よくわかんない・・・

クリム：あ そういえば最近変な女の子を見たっていう情報はいつたけどさ その情報が 東と西ですつごく離れてるところでの情報でさ 2人召喚されてたりしない？まださすがにワープなんてもってないだろうし……

ん？

2人いるってことかな……

蘭：多分奈々だけだと……ってことは 生きてるのか……はあ……よかったあ……

クリム：ま 見間違いか なにかよね

あいつのことだし どこかで飯食ってるだろう……

また いつか天然を見せてくれるだろう。

ルウ：さーてと

バムを二つ持ち立ち上がった。

ルウ：このことは ギルドに伝えておく だがあまり他言はしないほうがいいな 結構なさわぎになるし

自分たちは だまってうなずいた。

この世界にとって 一番恐れているといってもいいぐらいの 重大なことだしな

ルウ：んじゃ お前等は飯でも食つときなっ 俺が伝えに行つてくるから

蘭：うーい

クリム：りょーかい

ドアの開けた後のカランという音がなった後 無言が続く。
バムを食べつつ じっとクリムさんを見ている。

さっきまで 世界のどうたらこうたらの話をしていたのに かわいい

いつとかのんきなことを思っている。

つーか　なんでこんなかわいい人　ふっちゃったんだろ・・・
クリームさんが　ルウのこと好きならずっと一緒にいればよかったの
に・・・

そーんなことを考えていると・・・

クリーム：あんまり　じつと見られると恥ずかしいなっ

少し　照れくさそうに両手でバムを食べながら言われた。

そんなに　見てたかな・・・

蘭：いや　かわいいなっと思って

そういうと　クリームさんのほが　ピンクっぽくなった。

こんな俺でも　うれしいんだねえ・・・

顔の前で　手をぶんぶんしながら

クリーム：前もいったように　私ふられてるし　可愛くなんか・・・

蘭：ああ　それはルウから少し　聞きました。

クリーム：ふえ！？　ルウそんなこといつてるの！？

バムを落としちゃったぐらい　驚かれた。

蘭：そうですね　クリームさんって・・・

クリーム：クリームでいいよ？

なんか　この人達似てる。

やっぱ　お似合いだよ。

蘭：んじゃあ　クリームは　振られた時どんな気持ちだった？

さあ　直球どストレートな質問に　クリームはおどおどしてた。

クリーム：うーん・・・　なんだかんだ言って　私のこと　嫌いなん
だろうなあって　男子ってそういう理由作るのが得意じゃない？

あ この人疑う派だ。

蘭：本当にそう思ってます？

クリム：いまはねっ ほんとに好きだったら またいつてくれるだろっしっ

と言ってまたバムを買いにいった。

1分ほどで帰ってきて 大量にもってきた。

クリム：はいっ いくらでも食べていいよっ

蘭：あ ども

表面に木の実が入ってて レーズンみたいな感じなやつ。

これもまた 美味しい。

蘭：なんというか・・・

口にはいつている バムを飲み込んでから

蘭：もう しょうがない みたいな考えですね。

クリムは 片手で バムを小さくさきながら

クリム：まあ 私はルウ以上な人は みつからなかったけどねえ

いつてしまった みたいな顔をしながら さいたバムを口にほうりこむ。

蘭：んじゃ まだ好きなんすね？

クリム：うーん・・・まあ そういうことになるよねっ

手をのばし また取ってほおぼる。

蘭：んじゃ また付き合ったりしないんですか？ っつあちゃっ

バムの中の具が かなり熱くてしかも辛くて 口から火がはけるんじゃないか！？とか 思うぐらい。

いや　なんか楽しそうだから　マナを口におくって　ファイアを口から出してみた。

蘭：は　はけた！？　でたあっ　これで俺もインド人だあ！？

インド人も口から火をはけません。

いや　ダルシムは出せるけど。

クリム：・・・どしたの？インドジン？　熱いなら　はいこれ

かばんから　飲み物を出してくれたっ

蘭：あふあふっ　ありがとうございます　んでどうなんです？

クリム：それも　考えたことあるけど・・・2人とも忙しいしねえ

蘭：そですかあ・・・なんか　すみませんっ　変なこと聞いて

うん　なんか　悪いことしたような気がする。
多分。

クリム：いや　いいよっ　なんかなつかしかったし　そのかわり・・・

私の情報量みたいのかなあ？

高いのかなあ・・・

そこは　きつちりとられそう・・・

蘭：なんです？

クリム：こっちからも質問　この世界ってどう思う？

あれ？ちがうのか

スティック型のバムに　ネットとしている　ぬるやつをつけながら
食べる。

蘭：自分のいた世界とは　ちがって　ある意味ハードっすねえ・・・

いやモンスターとかいるのかも　ありますけど・・・

あと　お風呂がないんですよねえ・・・

クリム：おふろ？

いや 川が近ければ水浴びぐらいは したけど・・・やっぱ暑くても夜は冷える。

蘭：この机ぐらいの大きさで 大きな箱にお湯をいれて 体を清めるっていえば わかりますかね？

クリム：洗ったりするの？

蘭：はいっ

クリム：洗うとかなら ウォルトウーロがあるじゃない？

ウォルトウーロとは やわらかいブラシみたいので洗車みたいな感じで すんごくキレイになったような気がする 機械。

蘭：あれは あれでいいんですけど あったまりたいていというのが・・・

クリム：わかんないね

わるうござんしたねえ・・・説明できなくて。

蘭：なんていうか 体のしんが あたたまって 1日の疲れが ふわつととれる感じです。

クリム：ほへえ なんかいいいねっ

こんな話をしていると バムもなくなつた。

まあ 昨日は 食わずに寝たし・・・

クリム：キヨウは 完全休日にする気だから ルウもないし そのおふる？だっけ 作ってみようかつ

蘭：・・・へ？

つ つくるの？

22 お風呂作り（前書き）

遅くなりましたあ。

22 お風呂作り

22 お風呂作り

あんだけ買ったバムの代金を 自分は払わず全てクリームが払ってくれた。

蘭：うえ！？ わるいですよ はらいます

つて いったら・・・

クリーム：え？ いいよいいよっ お風呂作れんなら こんなもんちよろいっ

なんつーか 流石。

情報屋は もうかるのかなあ？

しかも ランクはCだからクエストでも儲けてるんだろうし・・・なんつーか エリート。

か 輝いてみえる・・・

クリーム：うえ？ 蘭はランクEなの！？ 試験うけなよっ

蘭：そ そうですね・・・

実のことをいうと あの試験受けるのめんどい。

なんてゆーか・・・

堅苦しい。

もっと 気楽だったら 受ける気あるんだけどなあ・・・

クリーム：本当 反則キャラだわぁ・・・ランクEでそのマナは・・・

もう これ聞きなれた。

蘭：ま しょうがないっすよ そういう体質です んじゃお風呂つくりに いきますかぁ？

クリム：なんか　せこいなあ・・・　ま　いいや　つくろっ

街のはずれの川についた。

人もいないし、安全だろう。

クリム：大きさは？

蘭：うーんと・・・

どうせ作るなら　おつきめをつくるかあ・・・

近くの木の枝をひよいとあげ　地面に作る大きさの線をひく。
たたみ6畳ぐらい。

クリム：これぐらいなんだあ・・・　深さは？

蘭：んー・・・　すわると　鼻あたりまで　つかるぐらいかなあ

満タンにいれると　めんどうだし　少し減らすと首あたりかなって。
さて・・・　ほるかなあって　思っているところに・・・

クリム：ほいほい　んじゃちょっと　離れててっ　グランド！

なんか　クリムが唱えると線を引いたところの地面が揺れて・・・

蘭：じ　地面が浮かんた・・・

クリム：あれ？土属性魔法グラ系しらないの？

蘭：みたことないっすねえ・・・

っーか　こんな量の土で　攻撃されたら死ぬだろ・・・

クリム：この魔法は　土をほったり　ゆらしたり　もちあげたり・・・

・地面に関することは結構できるよっ　最近使う人いないのよねえ
すごくマナ使うし　魔法を使ってる間動けないからなあ・・・

結構ダブってるからあげるよっ

蘭：わっ　どもっ

このグラを使って風呂の入れ物のところの土を硬質化しておく。
いや 泥風呂でもいいかもしれないが よく知らないし 危ない。
次に川からの水路を作り水をひいて ためる。

そこで 問題発生。

ファイアであつたためようかなあつて 思つてたら 水に直接やつても蒸発するだけで あつたまらない。

考えが あまかつたなあ・・・

クリム：どしたん？

蘭：いや 水をどうやってあつためようかと思つて

クリム：ん？簡単じゃん。

水風呂の真横に穴をほり 水風呂の下のところに横に穴をほる。

クリム：こんなかに たくさん入れて燃やせばいけるんじゃない？

うわ・・・ナイスアイデア。

蘭：あたまが まわりますねえ！

クリム：あははっ ありがとっ

てきとうに拾い集めて ほつた穴に投げ入れる。

ファイアでそれらを燃やし 温度を調節する。

蘭：うーん・・・

どれぐらいの湯がいいのか・・・よくわからないが・・・

42 か41 ぐらいがいいのだろう。そっちのほうが 風呂つて

気がする。

まあ 勘。

蘭：こんな感じかなあ

クリム：ほふうっ あつたかいねっ

手を入れて湯加減をたしかめる。

いい感じなので 足湯だけでもしよつかと思つたけど・・・

拭くもんがないと 始まらない。

蘭：んじゃあ 体をふける吸水性の高いタオルとかくせるぐらいの大きいタオル買ってきましようか

クリーム：はーいっ

街にもどって店をまわっているのだが・・・

なぜ派手な柄しかないのだろう・・・

ここは 関西か！？

いや 関西が派手なのかよく知らんが。

しぶしぶと派手なマスコットキャラみたいのキャラがはいってるタオルを買っていく。

なんだ こいつは・・・

ミニクマとコアラを合体させた感じのやつ。

中々かわいい。

クリーム：こんなのでいいの？

いつのまにか 横でもう買ってきてきているクリームがいた。

派手ながらのタオルをもつて。

蘭：ま こんなもんかなあ

クリーム：んじゃ はいってくるねえっ

蘭：いつてらっしやあい

クリームが先にいって入ってくるようなので 自分は露店でも見てまわる。

そう・・・

久しぶりのチョコ探しだっ いや生活用品的なものも買っよ？チョコ

とか チョコレートとか。

え？チョコって生活用品だよね？

ああ ちがいますか。

見てまわっていると 不思議な本をみつけた。
黒い本。怪しい本。気になる本。

あれ？この本見覚えあるような・・・

あつ 調合キット買った時に ついでに買ったやつだ。

買った本を少しも読んでないので バッグから取り出してみる。
ぺらつとページをめくると・・・

あれ？白紙だ。

安くしてもらえるからって 適当なものを買っただけじゃなかったなあ。

メイ：なんですかねえ？ コレ

蘭：全く わかんない 表紙にも なにも・・・

ん？ 4つて書いてある。

蘭：これって 4かんめつてことかな？

メイ：そうっぽいですね・・・なんか特別なマナが入れてあつて
1から読まないと読めないみたいなのは 聞いたことがありますね。

蘭：ああ やっぱそういうのあるんだ。

意外と変な本じゃないかも。

つてことは 今売ってるのは何巻だろう。

・・・2だ。

1があればこの本の意味もわかるのになあ・・・

蘭：おっちゃんこれいくら？

少しふけているが 体格もしつかりしていて長生きしそうなヒト。

おっちゃん：ほう・・・この本か・・・わしはすばらしいマナがう
めこまれていると思うのだが 誰も気味が悪いといって かわんの
だ・・・目利きでもできるのか？少年

蘭：いんや 黒いのが好きなだけだが・・・

あまり 言つて値段を高くされると面倒だし。

おっちゃん：ふむ・・・まあ いい 初めて見てもらったんだから
この本も喜ぶよ 1000リルでどうだ？

蘭：おお ありがとつ買う。

リルをはらって 中身を見てみるがやつぱり白紙。
そりゃそう・・・って

蘭：うわぁ！？

となりの屋台らしきところに チョコでコーティングされた バナ
ナみたいなやつがある。

これは チョコバナナか！？
うへへ。

蘭：これ20本くださいっ

おじさん：おお！？ そんなにかうんかいっ 毎度！

少し頼みすぎて 結構待ったが 待たせたからと言ってチョコバナ
ナを立てる用の箱をもらった。穴があいてるやつ。

ってことで 早速1本。

あれ・・・バナナじゃない。

なんつーか 甘酸っぱい味にまたチョコの甘みがマッチする。

とゆーか イチゴチョコ？

バナナの形で苺の味。

う うまいな。

ま チョコフォンデュとかあるしなあ。

メイもでてきて イッシヨに食べているところに・・・

クリーム：うおーいっ

手を振って 歩いてくる。

あ 髪よくふいてないなあの人。

蘭：よく 拭かないと風邪ひきますよ？

クリム：はぁーいつ　すっごくいねお風呂ってやつ。すっごくキモチ
よかった。

バスタオルみたいので　髪をわしゃわしゃしながらいつている。

蘭：んじゃ　俺も入ってきますねっ

クリム：はいはいっ

蘭：ぷはあゝ

なつかしき風呂。

川のせせらぎも　聞こえてっというか・・・

もうザアーっってうるさい。

まあ　眺めもいい露天風呂。

シャンプーとかないのが　玉にきずだが。

せっけんぐらいなら　売ってそうだけどなあ・・・

まあ　ゆっくりと入って少し大きめなので　泳いだり。

満喫した一日だった。

23 無限迷路(前書き)

なんか 珍しく へんなことかいちゃって・・・
ごめんなさいww

23 無限迷路

23 無限迷路

風呂に入った後 宿にもどって てきとうに飯を食っていた。
ルウ：風呂？

蘭：そそっ お風呂

クリム：すんごく きもちいーのっ

作ったお風呂の感想を述べている。

ルウ：ほほお 俺もはいつくるかなあ

蘭：おうおう 多分さめてるだろうから火いれるよ？冷たいまま入っても それまたおもしろいが

クリム：あはは 蘭つめたいなっ

蘭：ぶっっ

きよとんした顔で 見られている。

え・・・いまのつめたいっていうのに かけてたんじゃないの？
俺の思い違い？

なんかはずい・・・

蘭：さてとっ 俺眠いからねるわあ

ルウ：ん？はやいな

だって いまの結構はずいんだもの。
平常心で言うのが ぎりだったよ。

蘭：なんか・・・ねにゆいんだもの

か かんた・・・

まて 落ち着け。

クリム：そっかつ おやすみい

蘭：はい

最低限に短くまとめた。

部屋にもどつて なんもすることも無く ひたすらファイアを練習してただけど・・・

ファイアよりも なんとなくスパーク練習したいな・・・

と、思い適当にファイアを強くしたから スパーク系にうつった。びりびりと ずーっと 出してる。

壁をつたわらせて 部屋を処刑部屋みたいにしたり 髪の毛一本一本にいきわたらせてハンター×2の。ルアっぽくしてみたり。

なんか 楽しい！電気最高！！

そんな1人遊びをしながら寝た。

「ルウサイド」

ルウ：ほんとあれ 風呂だっけ？いいな 最高

クリム：ねー あんなもんあるんだねえ

ルウ：俺も 日本？だっけ そこに生まれたかったなあ マナもあんな多いし

クリム：ねーほんとあの子すごいよね Eであのマナって

ほんとに あのマナは 反則だ。

Cの下の方のやつなら 余裕でこえてるだろうってぐらい。体から普通に出ているマナでさえ 多い。

ルウ：なんつーか ほんと・・・反則

クリム：ぜったい のびるよねっ

ルウ：うーん・・・まあな

「蘭サイド」

蘭：あれ？クリムさん もういつちゃったの？

いつもどおりに素振りみたいのを終わらしてきたルウが 部屋にきた。
た。

ルウ：まあ あいつは仕事好きだしなあ あいつの情報はギルドにも売ってるし

蘭：ほほう やっぱ すごいんだなあ

だから リルも稼げてるんだろうな。

ルウ：そういえば 昨日ギルドにいったところ まずは本部で策をねるってよ

蘭：ああ やっぱそうだよな んで 適当にしてろってことが

ルウ：だな それでさ

こいつの提案って 大体めんどいんだよなあ。

ルウ：ダンジョンいかな？

前の時の鐘のときのダンジョンの話聞く限り おもしろそうとは思っていたダンジョンっていうやつ。

宝探しっぽくていいなあって 思ってた。

蘭：あ それ 俺行ってみたいと思ってたんよ だけど お前嫌いなんだろう？

その話も聞いていたから あまりさそわないほうがいいと思ってた。こいつから いうなんて・・・

ルウ：それがさあ・・・ 前にクリレアの次がでたって いったら？

蘭：い いったけ？

あたまのはじっこにあるような ないような。

ルウ：はあ・・・ お前が恋愛の話にもってたんじゃねえか。
蘭：ああ！ 覚えてない！

言った瞬間 蹴りがきた。

蘭：ぼふうっ

ルウ：ま それはいいんだが そのクリレアの次のシルレアがでた
んよ

ひ ひでえ こいつ。

蘭：ふうー・・・ んで？

ルウ：そのシルレアは マナがはんぱなく消費して 命にかかわつ
たり 威力がはんぱなくて危なかったりするし まだかなり貴重だ
から ランクBのクエストの報酬でくばられるんよ

蘭：ああ やっぱ貴重か Bねえ・・・

ランクを上げる気になれない・・・

ルウ：なんだけどな ダンジョンには 一階ごとにカードの宝があ
るんだが後のほ シルレアがあるらしいんよ

蘭：ほほお それでいこうと？

ルウ：そういうことだっ

蘭：おっけい

長いつていうことなので 適当に朝飯ついでに 適当に買う。

ルウ：あと ワープの毛をもってけっ

蘭：ん？なにそれ？

ルウ：ダンジョンの中からとか クエスト終わって ワープがない
ときに 最寄の街にもどれるってやつ またもどるのが めんどく
さいからな

蘭：ほほう 便利だな

つで ダンジョン入り口です。

ダンジョンは入ることに 形がかわるらしい。
なんか トル。コみたいだ。それかシ。ン？

まあ、いいや よくそのゲームしらんし。

ルウ：んじゃ はいるか

蘭：おう

入ると既に洞窟っていうか うす気味悪い。

通路には いたるところにモンスターいるし。

いや 見たこと無いやつばっか。

蘭：んで？どうやって進むのさ？

全くダンジョンは知らないのだ。

きたことも みたこともないし。

いや いま見てるけど。

ルウ：ふつーうに ダンジョンをかけめぐって 下の階にいく部屋
にいけばいいんだよ そして その部屋には 宝みたいのがあって
カードがはいってる まあ 最初らへんはノーマルしかはいつて
ないけどな

蘭：んで もっと後らへんで シルレアがでるってことか
ルウ：だな

モンスターを倒しつつ 適当に進む。

スパークのクラスを上げたいから 適当につかっていく。

蘭：お

その階段らしきものがある部屋についた。

んで 宝もあった。

開けたら・・・

あ フィルだ。

蘭：ほんとノーマルだな

ルウ：俺はファイアだ ダンジョンに入ったときの人数で宝の数や
モンスターの数が変わるらしい モンスターの強さはかわんない
し 宝の中身は上がったりはしない。

蘭：ほほう

ルウ：まあ 簡単な説明だな 俺もよく知らない

まあ こいつ嫌いとかいつてたしな。

メイ：では ここからは私が・・・

蘭：お よろしくつ

メイ：今回当てのシルレアは予測でいくと レアが30階あたり
クリレアが60階あたりなのでシルレアが90 100階あたり
にあるはずです。

蘭：・・・

100だと・・・？

蘭：まて ルウおま 最高記録80階とかいつてなかったか！？

ルウ：おう

こ・・・こいつ・・・

蘭：まて 帰る。

ルウ：おいおいっ まだはじまったばかりかだぜ！？

蘭：いや 無理だから！！

ルウ：余裕だつて・・・多分

蘭：多分つて なんだよ！？

くっそう・・・

これは 意外にめんどいぞ・・・

メイ：あ あとですね・・・1階上がるごとにダンジョンレベルが
1LV上がりますよ？

蘭：ん？モンスターが強くなるの？

メイ：モンスターがかわつたり 道がもっと 入り組んだりと・・・
まあ 進めば進むほど つらく むずかしくなっていきますっ

・・・

蘭：か かえっていい？

ルウ：ダメだ

蘭：・・・むりだああああ！！

悲痛な叫びは ダンジョンの中を響かせた。

23 無限迷路（後書き）

あまり 後悔はしてませんけど・・・
なんてゆーか・・・
ながくなりそうだなあ・・・

24 無限ループ（前書き）

なんか ダンジョン編長くなりそうですw

24 無限ループ

24 無限ループ

蘭：お グラだ

いま7階です。はい。

宝の中身は本当にノーマルしかでない。

まあコレクションブックにいれるだけだけど。

結構これそろってきたなあ。

18かつ あと2枚で確かギルドから報酬もらえるよね。

蘭：そういえばお前ってこのコレクションブックどれくらいたまつてんの？

ルウ：ん？ああ いま5 60枚だろうな

蘭：ああ やっぱそんなにそろってんのか

ルウ：召喚のカードはいれたことないから まだまだいれられるからなあ

蘭：召喚って ブラドラのときの報酬の一枚しかでてないんだけど あれってモンスターからもたまにでるんだろ？

ルウ：だな 同じモンスター何度も倒してりゃ 出るだろ

やっぱ そういうものなのか。

あれだドラ。エで 起き上がって仲間になりたそうにしている。みたいなのやつか。

そんな話をしつつ ついに10階！

蘭：2桁だぜ！

ルウ：！！？

なんか 変なテンションでごめんなさい。

こんなことしないとやっていけない・・・

ルウ：ど　どした？

蘭：いや　なんでもない

つーかね

歩いて　いくのは全然いいんだけど

モンスター倒していくのは　なんとなくめんどい。

いや　スルーしていてもいいんだけどね・・・

ずっと　ついてくるんよ　この子達。

つてことで　画期的な方法を見つけた！

蘭：スパーク！

自分は　スパークを地面にして　地面にまとわらせてみた。

そう　ゲームでいうと　ここ通ったらダメージ受けます　みたいな
感じに。

10階つていっても　ただの雑魚モンスター　スパークで倒しちゃうのさ。

だから　地面にやれば　モンスターを一気に倒せるっていう　すばらしい戦法。

昨日やった　壁にやって処刑部屋みたいなことにしたのを思い出した。

ルウ：ほう　スパークのクラス結構上がったるな

蘭：まあ　暇だったしな

昨日どんだけ　1人遊びしたことか。

なので　一気に1階層のモンスターを全滅させられる。

これ　きた！

結構マナ使うが　楽だ。

そんなことをしていると　スパークが途中で止まり　そこには見たこと無い扉があった。

蘭：これ　いつものとちがくね？

途中にトビラとかは　あつたが　なんか見の前にある扉はでかくて
威圧感がある。

ルウ：ああ　これは10階ごとにある　ボスルームだ

蘭：ああ　ボスっているのか・・・　強いのか？

ルウ：まあ強いっちゃ　強いが・・・

扉を開くと　少しかつこよさげな　犬っぽいのが・・・

ルウの無言でのサイクロンで倒れた・・・

ルウ：まだ　10だしな　弱い

蘭：かつこよかったのに・・・この犬

さあさあ　ドンドンいきます。

そう　なんとなく飽きてきた30階。

スパークだけで　倒せなくなったが　確実に弱らせられるので　スパーク二発地面に放つてしとめていった。

たまーに飛んでたり　雷属性のやつには　ファイアを使っていく。
ボスモンスターも　サンダーで一撃でしとめる。

蘭：おおー

ついに　できたレア。

ファイアボールだったのが　残念だ。

蘭：ダンジョンいくとき　魔法コンプリートできるんじゃない？

ルウ：6属性はいけるんだが　光と闇は　中々でねえぜ？　俺も光の一段階目のシャインしかもってないしな

蘭：ああ　そういえば　光と闇ってあつたな。

一度も使ってる人をみたことない・・・

蘭：つかつてる人いるの？

ルウ：はあ？光ならクリムが使ってるだろ。

蘭：うえ？クリムって土じゃないの？

お風呂作りのときに 土つかってたけど・・・

ルウ：あいつは 色々な魔法のクラスが上がってるしな その中でもシャインが3クラスだった気がするぜ？

蘭：ほへーえ・・・

平均的に上げてるのにちゃんと切り札はあるってことか・・・。
なんか 流石

蘭：ルウのサイクロンとかは？

ルウ：俺のはサイクロンが2クラス トルネードが4 ハリケーンが6だな

蘭：ほほうー

どれくらいだと 強いのかよくわからんが。

さあ 56階です。

スパークだと 4回やっても死なないやつが でてきちゃったから
サンダーを地面にやって 一気に張り巡らしていたら・・・
マナきれました。はい。

ルウ：おま・・・とばしすぎ

蘭：この戦法いいじゃねえかよ

ルウ：いや そのままだと 死ぬぜ？

蘭：・・・そか

つてことで 一度休むことに。

もう5グリ半だそうで（22時）

宿出たのが2グリ（8時）ぐらいだったので14時間も暗い中いたら

しい・・

光を浴びたい・・・

ルウ：60階のボスからは 一気に強くなるからな？
蘭：まじかよ？

これ以上 行きたいと思えない・・・
つか 無理。

まあ ここまで来たんだから行くしかないが・・・

堅い石の上で ねた・・・

かなり痛い・・・・

24 無限ループ（後書き）

なんか ダンジョンって聞くと 色々思い出しますよねえ・・・
ドラクエとか マビノギとか

今回カットしすぎかなあ・・・次がんばりますう・・・

25 無限回廊

25 無限回廊

蘭：さぶっ

かったい石の上で寝ていた俺は地下の寒さっていうのを初めてかんだ。

まーだダンジョンなのかぁ・・・

ルウ：まあ そうだろうな

蘭：なんで お前は そういう寝袋みたいのあんだよ！

ルウ：これ？小型安眠寝袋だ

蘭：名前は きいてねえ！

くっそう・・・

さむかった・・・ 何度も起きた・・・

マナは全快してるようなので バンバン使う。

ルウ：なんか・・・お前のマナの成長率はんばないよなぁ・・・

蘭：ん？そか？

ルウ：俺においつきそうなくらい 昨日で上がってきてる

蘭：ほほう・・・ランクCと同レベルまでできたかぁ・・・

そして 60階のボスについた。

ルウ：ま・・・ランクCのだろうと 実力がEなら意味ないからな？

蘭：おけおけ こっからなんだろ？

ルウ：おう いくぜ？

そこを 開けると 普通の部屋より数倍広い部屋になった。

そして 真ん中には・・・

ケルベロス・・・

ケルベロス：ぶわ　ぐわ　バウォーーーー！！！！

3つの顔が　ほんと・・・怖い・・・

だけど　前見たときよりは　絶対強くなってるはずだ。

ルウ：うし　いくぜ？

蘭：おうけい・・・　ライトニング！！

やばい　かなり詠唱時間が早い。

5秒ぐらいでいけた。

部屋に稲妻の音が響く。

確実に動きもとめたし　決めた。

黒白のやつよりも　詠唱みじかったよね？俺。

蘭：メイ！

メイ：はいっ

ツインにして　SBをしかけ・・・

すんごく　マナをこめられる・・・

これ・・・危ないだろ・・・

蘭：ルウ！しゃがめ！

ルウ：！？　おお

超特大SB。

部屋の壁と壁にアタリながら進む。

ケルベロスは　それを噛み砕こうとしたが　3つの顔の2つが　死んだ。　べろーんってなってる。

ルウが　最後の一匹にやりを投げて　そのままかけよりやりを下にひきさいた。

蘭：うおお・・・

メイ：蘭さん・・・すごすぎます・・・

蘭：あはは・・・ありがと・・・

ダメだ 強すぎる。

ルウ：さすが 反則キャラ

蘭：だろ？

ルウ：これなら いけるな だが・・・ここから問題だ・・・

蘭：ん？

ルウ：こつから ダンジョンというよりも・・・ボスラッシュと同じだ。

蘭：は？

ボスラッシュってあれ？

あのお・・・ 何度もやったやつですか？

蘭：あれが 何度も続くの？

ルウ：そうだ

蘭：・・・ いまの マナ使いすぎだな・・・

最初に言えよそういうの・・・

ルウ：ああ だが 10階じゃないボスは 弱めのやつばかりだから。

蘭：そか・・・

きつついなあ・・・

カードの宝は ついにメテオがきた。

ファイアボールの次ね。

さて・・・さくさくいく。

通路がなくなつて 階段降りた瞬間 ボスルーム。

6 1 ブラドラ

6 4 でけえ・・・とり・・・

6 7 そんなのあり？ってぐらいの 化け猫

印象的だったのは そんぐらい。サウザンドソードいた。

つで70・・・

マナポを使って ボスルームをあける。

ルウ：これは・・・

蘭：か かけ・・・

白竜・・・

多分 名前は 白竜がホワイトドラゴンだろ。うん。

メイ：蘭さん

蘭：ど どした？

メイ：ランク上げてないのに ずっとツイン使ってたから・・・
ウエポンアップが・・・

蘭：でたの！？

メイ：はい

蘭：相手に不足はない それ 使ってみよう

メイ：はいっ！

メイが光となつて・・・

・・・

真ん中に持つところがあつて 先にももとも 剣がついてる。

蘭：かけえー！！

メイ：ダブルソードですっ

ルウ：な なんだそれ・・・

そんな はしゃいでるところに・・・

火球がとんできた・・・

蘭：ぶつつねえ！

とっさによけて まにあつた。

火球のスピードもはんぱないけど・・・

まて 白竜のあのでかさで かなり 早いスピードなんだが・・・

・
ルウ：ま それの強さみせてくれ。
蘭：・・・ これむず・・・

だが なんか 手がなれた・・・
いける。

蘭：フィル！

白竜の目の前に一気にとぶ。

一気にたたみかけようとしたところに・・・
口の中がチロチロもえている・・・

蘭：ちょま 二撃目はやくね！？

体をそつて よけたところに しかける。

少ししか ささんない・・・

硬い鱗だが・・・

やべ・・・ いける。

ライトニングを片方におくりこみ メテオの火を片方のソードに。

蘭：だあああああ！！！！

たてに回して二撃戻して1撃あたまの上でふりまわして 5撃くわえる。

鱗が完全にはがれた。

そして そこにルウの珍しく風を発動させて まとわせて太刀で一撃をくわえる。

はげしい一撃に白竜は 一度飛んだ。

だが 全く余裕で とんで・・・

蘭：こんにちは

口に 手をつっこみ・・・

蘭：スパークっ

軽め調子でいったが・・・

スパークのクラスだけは はんぱなくあがっていた。
そのまま白竜は落ちていった。

蘭：なんださっきの お前の風の一撃・・・

ルウ：ハリケーンを発動して 完全まとわらした攻撃 一発の威力
だったら またまだ負ける気しないからなあ？

蘭：まあ・・・このダブルソードも強いぜ？

ルウ：あの鱗簡単にはがしてたからなあ・・・

メイ：まだまだ 能力は発揮してませんよ？

蘭：能力あんの！？

メイ：ありますよっ

新武器もできちゃったし・・・

これは いけるかなあ？

26 鬼畜すぎるっしょ？

26 鬼畜すぎるっしょ？

はい 途中のボスはこの新しいダブルソードで余裕でした。
この双槍っぱい武器は強すぎるね。

なんだって 使いやすい。

なんか（まごごそら）の（によいぼつ）みたい。
っーか かつくいっつ。

ルウ：ついに・・・かあ・・・

蘭：だな・・・

80階。

もう10階ごとに一気にレベルが上がってる・・・
ケルベロス↓白竜ってはんばない・・・2倍ぐらい強いんじゃない
かってくらい。

「白竜の数倍は強いはず。

ルウ：ここを超えれば記録を超えるぜ？

蘭：うし・・・

ポーション類をやぶってステータスのやつも使っておく。
初めてステータスのほうを使っただけ、凄いやこれ。
やべえ 体軽い。力がみなぎってくるってこれのこと言っただろう
な。

ルウ：開けるぜ？

何も言わずに頷く。

緊張してきた。

開けられると・・・

蘭：あ・・・？

一匹の黒狼・・・

大きさ的にはルウのウィルドと同じくらい。

そんなに大きくないんだが・・・

ルウ：威圧が・・・

蘭・・・な？

すんごく怖い。

ここにいたくない。

狼：ワンワオオオオオオオ！！

俺のテリトリーにはいったな？とでもいうような雄たけび。

足がすくむ・・・

怖い怖い怖い怖い怖い。

油断をすると死ぬ。

恐怖が自分にのしかかってもそれを振り払う。

ダメだったって責任なんて感じない。これは自分の戦いなんだ。

蘭：いくぜ！

フィルで一気に仕掛けに行く。

すばやい動きに対応して狼もステップがすごい。

かすりもしない。

そのステップの中でも確実に攻撃を仕掛けてくる。

それをスランフィルでガードをしつつスパークでとめる。

少し動きを止めたところに一撃を加えるが 少し当たった瞬間避け
たらしい。

ほんのさきつちよにしか血がついていない。

蘭：は はええ・・・

ごくりとつばをのむ。

ルウは風を黒狼にやっているがほぼあたらない。

太刀で左右にふり前におびき寄せたところを縦切りした。

確実に当たったと思ったがサイドステップで避け一回転してサマーソルトをしかけてきた。

ただの尻尾なのに　ぎりぎりよけて顔に傷がついた。

ルウ：おいおい・・・

顔の傷を触りながらルウは言った。

蘭：きつついな・・・

メイ：ならここで　能力を使いましょっ

蘭：ああー！

そういえば　そんなのあったな。

狼の攻撃を避けながら説明を聞く。

メイ：コレは　攻撃速度と移動速度を格段に上げる武器なんですよ。

私にマナを送れば送るほど　速度がどっちも上がりますよ

蘭：もつとはやく　いってよ！！

もつと練習とかしたかった。

今この場でなくても・・・

メイ：こういうときに使わないとですよっ

蘭：なにそのヒーローは送れて参上のな・・・

メイ：ヒーロー？

ま・・・いいや。

マナを送ってみる。

武器が軽くなり　体も軽くなった・・・

蘭：・・・すげえ・・・ライトニング！！

一気に近づいて ライトニングをまとった攻撃を仕掛ける。
ルウと相手してた狼は避けきれず一撃をくらった。

血を出しながら俺と距離をとる。

蘭：いける・・・

いまのは不意打ちでいけたんだ・・・
もつとマナを・・・

今の俺なら音速も超えられるような気がした。
一気にたたみかけにいった。

突きを入れて 狼の腹にすきが出来た。

そこを一気に刺した。

決まった。

だが・・・マナをこめすぎて俺は動きが鈍くなり・・・

狼は刺されながらも・・・

俺の横腹をかみきった・・・

声も出せない痛み・・・

狼と俺はその場に倒れた・・・

呼吸が辛い・・・

ルウの声がなんとなく・・・聞こえる・・・

なんか・・・温かい・・・

血の臭いがうすれていく・・・

意識が・・・世界が・・・

死ぬのかな・・・

26 鬼畜すぎるっしょ？（後書き）

なんか 久しぶりにこんな感じの書きましたっ
強すぎな設定にしちゃってたんで ちよっとねw

27 天国？（前書き）

すいません。遅れました。

待っていた方いないと思うけどがんばりまっ
感想していただけると涙ちよちよぎれますw

27 天国？

27 天国？

目が覚めたとき、腹に激痛がきた。

蘭：がふ・・・

ルウ：おおー 起きたか 死んだかと少しおもったんだがな。

ここがどこだか わからない・・・

天国ではなさそうだ。

蘭：ここどこ？

ルウ：ギルド緊急医療病院。

蘭：はあ？

なんかながったらしい名前を言われた。

まあ病院らしい。

蘭：っーか なんで俺生きてるの？

あの出血の量だったら、普通に死んでいたはず。

ルウ：ワープの毛で即行帰ってどうにかしてつれてきた。

蘭：はあ・・・よくいきだな・・・俺

なんか 自分が怖い。

ルウ：まあ反則キャラだしな。

蘭：その言葉を今日はありがたかんじるよ。

あのあとワープをして、医療所につれてこられたらしい。ルウも怪我をしていたのだが・・・

ルウ：ん？俺？別にそんな怪我してねえし。

蘭：そ、そうか。

まああまり気にしないことにした。

蘭：惜しかったな・・・あと少しでシルレアだったのにな。

ルウ：あんなやつがいて、まだあの先があるし・・・無理だろ。

蘭：その考えにいくのおそすぎだろ！

なんなんだこいつは・・・。

ルウ：つーかお前、本当に反則キャラだな。

蘭：さつきも聞いたが？

ルウ：おう。何度でもいつてやる。この傷で1日で目を覚ますなんてどうかしてるだろ。

そういつつつ蘭の腹をつつく。

蘭：つつ・・・え！？俺そんなに寝てたの！？ってパターンじゃねえのかよ。

ルウ：だな。めんどくさいなそういうノリツッコミ。

蘭：うつせえよ。

こいつは冷静のときが多すぎる。クールぶりやがって。

蘭：まあこんなお前につつかれるぐらいで痛いんだから何してようか・・・。

ルウ：しらん。つーかこのペースだったら明日には歩いてそうだけどな。

蘭：わ、わからん。

こつちの世界にきてからの治癒能力どれだけ上がっているのか知らないが。

まあ・・・尋常じゃないほど上がっているのは確かだ。

ルウ：まあ、なんかしてる。ギルドから結界のレベルが上がったっ

て聞いたから少し話を聞いてくる。

蘭：うおっ逃げんのかよ。

ルウ：いや、すまんがマジな話らしいから一応な。

蘭：都合いいな、くそ。

ルウは行ってしまった。

どうしようもなく一人ぼっちで横たわっている。
というよりもやることがない。

蘭：本・・・読みたいなあ・・・。

久しく本を読んでいなかった。

車椅子よりも素晴らしい画期的な機能がついてる自動車椅子にのって露店を見て回った。

そして蘭はついにみつけた。

蘭：お・・・おいしいチョコレートの作り方だって・・・？
そう、表に美味しそうなチョコの絵がかかっている。

迷わず買って病院でねころがりながら読んでみる。

蘭：うに・・・ウ・・・ウニユミリュの実ってなんだよ。

すごく言いづらい実だった。

これは早口言葉に使えるな。

つーか作り方が複雑すぎてなんか面倒になってきた。

まあ、あとでやるが。

「アイス食べたいな・・・。」

この世界には凍らしたものを食べるという習慣が全くない。
氷系魔法で出した氷を食べてはみるものの・・・

「歯・・・はが・・・。」

あまりにもかたすぎる。

削ろうにもなにもない。

「はぁ・・・暇。」

なんか色々として何も成功せずに寝転がっていた。
というよりも寝た。

目が覚めると背中 of 激痛がなくなっていた。
少し痛い程度だった。

ルウ：おう。おきたか。

蘭：やべえ。結構余裕に動ける。

ルウ：まあ、それは予想してたから全然おどろかねえ。

蘭：うっさいな。

まあ反則キャラばんざい。

ルウ：でな。結界のモンスターが強くなったよ。

蘭：それなんとなくさっき聞いたんだが。

ルウ：具体的に言えば白竜ぐらいだそうだ。

蘭：なら・・・まあいけるな。

ルウ：だな。それで少し北のほうの町にいつてくれだそうだ。人が
いないそうだな。

蘭：ちようどいいな。

なんか懐かしき召喚師にまた一歩近づくと思った。

ルウ：ま、明日動けるだろ？

蘭：おう。余裕っばい。

ホント怖いなこの回復力。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0819i/>

僕の世界・世界の中で

2010年11月19日08時50分発行